
涼宮ハルヒ（コ）の短編集

ヒルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒ（コ）の短編集

【Nコード】

N8603E

【作者名】

ヒルト

【あらすじ】

…キョン子執筆中に浮かんできた単発モノをこの『涼宮ハルヒ（コ）の短編集』の方に更新していこうと思い、新しく作りました…と言いますか、何処かに貼つとかなないと頭の容量が足りなくなると言いますか。とりあえず、共々に宜しく願います（最敬礼…）

………無期限凍結中

涼宮ハルヒの仮面 『タロットが導くその先は?』 (前書き)

一発目です!

合間にP4 (ペルソナ4) をプレイしてる内にふと思い浮かんできたネタです。

では、どぞー

涼宮ハルヒの仮面 『タロットが導くその先は?』

「…はあ」

ダルい、眠い、面倒くさいの三重苦が襲いかかってくる長い長い坂をひたすら登る。

学校に着いたら着いたで授業という理解出来ない説明、睡魔との戦い、背中をシャーペンで刺されるという三重苦。放課後はハルヒのブレイキ役をせにやらんツツコミを入れにやらん。

…唯一の救いは愛しのマイ・エンジェル朝比奈さんの注いでくれるお茶が飲める事か。

「…はあ。ん？」

溜め息を吐きながらトボトボと歩いていると不意に靴の裏から硬い何かを踏んだような感触が来た。

「…何だよ」

オレは足を退けて一体何なのかを確かめるとそこには…

「……カード？」

変わった絵柄のカードが落ちていた。

オレはそのカードを手にとると落ちていた辺りをもっと見回してみる。が、落ちているのはこの一枚だけらしい。

…これは、

「トランプのカード……じゃねえな。何だコレ」

それはいつも部屋で古泉相手にゲームする時には見慣れているトランプのカードとは違ったのだ。

勘違いしたのは裏側が上だったせいで表返してみるとスペードやクラブといったマークのモノではなく、一つの絵柄…棒切れに袋を引っ掛けて持っている人間？ と、

「…これは、犬…か？」

が、描かれていた。

よくよく見ると”0”という数字もあった。

「…ふむ」

とりあえず、一般的なゲームに使うような類のモノでは無さそうなのは解る。が、それだけだ。

「…何か高そうではあるよな」

これが率直な感想だ。

裏面の柄が凝った造りで、何とか下手なトランプ一式よりもこの一枚のカードの方がまだ価値では勝ってるんじゃないか？ とさえ思える。

光の加減で表面を見てみたが幸いにも両面共に目立った傷とか細かい傷も無い…全くの無傷だ。

「…長門か古泉に見せてみっかな」

オレはそう呟くとカードをポケットの中に入れる。
二人に見せればこのカードが何に使う奴なのか解るし価値も解る
だろうという事を胸に坂登りを再開した。

…

「あ、キヨン！」

教室に入るなり、珍しい事に我らが団長こと天上天下唯我独尊…
もとい涼宮ハルヒがオレのいつもの挨拶よりも先に声を掛けてきた。
…朝一番でお前から声掛けるなんて珍しいな。

「むっ。何よ朝からその態度はっ。ならもつと有り難がりなさいよ
ねっ！ わざわざこっちから声掛けてあげたんだから！！」

「へーへー…」

まったく。ほんの少し皮肉っただけで数倍返ししてくんだからな。
困った団長様だよ、ホント。

…で？

「今日に限って朝っぱらから機嫌が良いのは何か理由があるんだろ
？」

「っ……何よ？ それじゃあ普段は機嫌が悪いみたいじゃない」

…みたいじゃなくて実際に悪いじゃねえかよ。

と、面と向かって言えるほど勇気も度胸も無いので軽くスルーしつつ、

「？ ハルヒ…それ」

オレの視界にハルヒの手に持っている”カード”らしきものが入った。

するとオレの視線の先に気付いたのか、ハルヒの顔が眩しさを覚えてしまうような満面の笑顔に変わると、その”カード”をオレの目の前に持ってきて口を開いた。

「そうそうっ！ コレよコレっ。ね、ね、聞いて！ この”カード”ね、学校行こっと思って玄関を開けたら目の前に落ちてたのよ！」

ハルヒが見せている”それ”は紛れもなく

「…落ちてたのか」

「そっ！」

オレが坂の途中で拾った”カード”と同じモノだった。

「最初はゴミだと思って道中のゴミ箱に棄てようかなって思ったんだけど、よくよく見ると裏の絵柄が無茶苦茶凝っててね？ それに比べると表側に至って普通なんだけど傷とか全然ないし、とにかくスツゴク綺麗だったから皆に見せようと思って棄てずに持ってきたのよ」

「…へ、へえ」

オレは、何で棄てなかったんだ？ という言葉を何とか飲み込む。
下手な事を言うのはヤバいとオレの中で警鐘が鳴ったからだ。

ハルヒが持っている”カード”の絵柄には木らしきものが円を形
作っており、その中に人：背格好からして男か？ …らしき物とそ
れを中心に四つの絵柄が四方に陣取っている。

それはオレの”カード”とは全く異なっており、数字の方も”0
”ではなく”21”と書いてある。

「ね。綺麗でしょ？」

まるで自分の大切な宝物を見せる子供のようなキラキラとした笑
顔を見せるハルヒ。

…これは、オレも似たようなの拾ったぞって言ったほうがいいの
だろうか？

「放課後になったらすぐ部室に行くわよ、キョン！ 皆にも見せな
いとねっ！」

と思い、腕が動こうとしたのだが、ずっと向けられている喜色満
面のハルヒを見ていると後でも良いかと感じ、伏せておく事にした。
自分が拾った”カード”に気を取られていたのでハルヒはさっき
の動きには気付いていない…変わらず、笑顔のままだ。

「…そうだな」

それ以上は何も言わずに、オレはただハルヒの笑顔を眺める。
別に伏せたのには他意なんかはない。

ただ、今じゃなくなっちゃって今日はお互いに掃除当番じゃないし、
部室に向かう途中でも構やしない。今、こんなにハルヒの奴が嬉し

そうにしてんだから水を差すのも悪いだろ。

「……おい、イチヤつくのもいいが席座れ」

「っ」

背後からの声にビクツとして後ろを振り返ると岡部が半眼でこちらを見ている。

「……え、は？」

……来るの早くないですか、マイ・ティーチャー？

「何が言いたいのか知らんが時計を見る。HRの時間だ」

「……なっ？」

言われるがまま時計を見たら既に鐘が鳴る時間がとうに過ぎていく。

……お、オカシイぞっ？ オレが教室に着いた時はまだかなりの余裕があつた筈っ。

「早く座れ。涼宮もだ」

オレは慌ててハルヒの方を見るが、アイツは既に自分の席へと向かってしまっている。

そんな後ろ姿からは何やら怒気みたいなモノが見え、世が世なら世紀末霸王と呼ばれてしまいそうな程のオーラを発していらっしやる。

……えゝとハルヒさん？

「お前も早く座れ」

岡部が後ろからせつついてくる。

「…はあ」

オレは既に席に着いているクラスメート達の生暖かい視線…誰でもいいから一言言ってくれば…を一身に受けつつ自分の席へと足早に急ぐ。

谷口は何やらバカップルがつか見当違いな事を叫んでいるが、とりあえず無視。

「時間来てんなら言ってくれよなあ…」

「…うつさい」

オレは席に座るや後ろを向くと机に突っ伏しているハルヒに向かって説明を求めたが一言でバツサリ斬られた。

今の今まで機嫌良くキラキラとした笑顔を見せていただけにこの突っぱね具合は殺傷力がある…ヤバい凹みそうだっ。

「…分かったよ」

オレは何とかそれだけを言えると前を向いて頼杖をついた。

「っ」

後ろでハルヒが何やら動いたような気がしたが、今のオレは絶賛凹み中であり、そんな情けない顔をハルヒの方に見せる訳にはいか

ないし、見せてしまうワケにもいかないので気付かないフリをする。
HRが終わり、岡部と入れ替わりに担当の教師が入ってきて授業
が始まって完全にもそぞろ。

教科書類を机の上に出してはいるが開く気すらも起きない。

「……っ……っ」

そして時折、背中が何かに刺されてチクチクとするが気付かない
フリを続け

「……！」

「っづ？！」

オレの変な呻きに席に近いヤツらが一斉に振り返ってくる。

「えー…何でもない」

とりあえず前向けと手で伝える。隣のヤツが何やら言いたげに
オレの後ろを気にしているが無視する。

「……？」

が、背中に感じる妙な違和感。

刺された所にシャツの生地が滲むように張り付いている。

…これは血でか？

「…っ、？！」

オレの予想を裏付けるかのように後ろでは刺した本人がかなり焦

っているのが分かる。多分、シャープンの先に血でも付いてたんで驚いてるんだろう。

オレは静かに溜め息を吐いて肩を小さく揺らすと改めて頬杖をつく。

「? …? ?」

後ろのハルヒが何やら戸惑っているような気もするがオレがまだ立ち直れてない以上、後ろを振り向けないのでどうしようもなかった。

…

とりあえず授業が始まるまでの休み時間は寝たフリをしてやり過ぎた。

2時限目が終わっても同様。

「…キヨン? えと、先生来たよ?」

3時限目に入った時にハルヒが怖ず怖ずとした声で呼び掛けてきたが、それに対してオレは後ろを振り向かず、緩慢に身を起こすと教科書類を変えてはまた寝入った。

「……う」

耳がそんなか細い呻きを拾う。

流石に血が付くほど刺し込んだのを気にしているのか、強気に出れないようだ。

…そんな声出すなよ。

「…」

オレは顔だけ上げて片腕にアゴを乗せ、空いてる手で筆記具からシャーペンと付箋紙を取り出す。

…これに字書くの久しぶりだな。

「キヨン…?」

挙動が気になったのか、ハルヒが小声で呼んでいる。

オレは付箋紙に背中のは気にすんとか、幾つか旨を書くときと身を起こし、脇の間に手を入れて付箋紙を後ろの背凭れにペタッと貼る。

「?」

気配でハルヒが背凭れに貼り付けた付箋紙を剥がした音が微かに聞こえる。

「……………ん」

首肯するような声が聞こえたのでオレはまた頬杖を着く…少しは立ち直ったし、この授業が終わったら後ろ向くとするか。

…

後ろから妙にソワソワとした気配を感じつつ、3時限目の終了を

告げる鐘の音が鳴り終えるとオレはすぐ後ろを振り返った。

「っ……………」

と、同時にハルヒのやつはオレが後ろを振り返ると見るや、肘を着いていた机から離れると椅子の背に凭れ、腕を組むと窓の方へとそつばを向いていた。

…授業中はソワソワしていた癖にコレだもんな。ま、すぐに切り崩せますがね。

「ん」

オレはポケットに仕舞っていた自分が拾った”カード”をハルヒの机の上に置いた。

「…何よ？　って、キョンそれっ!？」

何って、見たまんまだが？

ハルヒはオレの”カード”を手にとると自分のも引き合いに出して見比べ始める。

「…だって、アンタさっきは何も言おうとも出そうともしなかったじゃない。何で出さなかったのよ!？」

「オレはお前のマシンガントーク中に口出せるほど、こっちの方は達者じゃねえんだよ」

「……ふーん」

…いや、ふーんって。ホント、お前ってヤツはオレの言葉には耳

貸さないよな。信じとけよ。

「ま、そんな事はどうでもいいわよ」

「ど……………はあ」

「裏の柄が同じな所を見るとアンタとあたしのは物は同じみたいね」

二枚を裏返して並べ、

「で、表はそれぞれ違う」

表を返していく。

「……………？ あれ…この絵って」

…ん、どした？

ハルヒがオレが拾ってきた方の”カード”を手に取るとアゴに手を当てて、何やら片眉を上げている。

「何か気になるモノでもあったか？」

「…”0”って書……………あるし……………でも、何版な……………これ？」

…うんん？

ブツブツと何かを呟くハルヒ。一体、何に気付いたのかは知らないが、オレは置いてけぼりなんだが？

「……………つ。キョン、これって何処で拾ったのよ？」

「ん？ ああ、確かあの坂の半ばくらいか」

「…じゃあ、それまでに何か変なの有った？」

…んん？

「さあ…？ 眠いの我慢しながらの通学だからな……とりあえず、これ拾った時にはそれ以外は何くんも無かったぞ」

「……ホントに注意力散漫ね。アンタその内に事故るわよ？」

「……誰が事故るか」

…つか、勘弁してくれ。お前の口から事故るとか言われると予言にすらならない死の宣告レベルなんだからさ、滅多な事を言わんでくれまいか？ って…ハルヒ？

「何ニヤついてんだ？」

「キョン…ついに来たわよ」

何が？ …とは口が裂けても言えません。そう、言わない…オレは言わない。だが、ハルヒはそんな事を構いもしない女であり、言う相手が居ないのなら

「不思議が向こうからやって来たってんだからコレは我がSOS団に喧嘩を売ってきたと言っても過言ではないわっ！！」

自分で言っちまいやがる…何もかもが最短距離だ。

「……喧嘩とは物騒だな。つか、別に不思議もクソも無いだろ、こんなのか？」

道端で変な”カード”を拾った…そう、”拾った”だけだ。それが何でハルヒが欲して止まない不思議に直結する？　こんなの道端で硬貨を拾ったのと大差ないだろ？

「諭吉さんが大挙してるバツグンだか拾えば確かに大事だが、たかが”カード”の一枚や二枚…」

「だあかあらアンタは注意力散漫だって言うのよ！　何の変哲もない”カード”がわざわざアタシん家の玄関先に落ちてる筈が無いでしょっ？」

…おい。コレはマズくないか？

ハルヒのヤツ、完全にこの”カード”は普通じゃないか思い込み始めてやがるっ？　くそっ。

「…つか、どう見てもただの”カード”じゃねえか。考え過ぎだろ？」

オレは何とかハルヒの気を逸らそうと試みる。が、実際に実物がある以上、たかが並みレベルのオレが使う口八丁だけでどこまでやれるか…

「正確には占いに使う”タロット・カード”よ」

…タロット・カード？

「て…アレか？　ロードローラーとかそして時間は動き出すとか…」

「……何ソレ？」

「…いや、今は忘れろ」

ただの妄言だ、妄言。

「まあ、いいわ。でねっ…」

が、その妄言を取り消したのが思うつぼだった。間隙を縫うようにハルヒが口を開き、ここから独壇場となった。

…オレが口出す隙なんか有りやしねえ。

「……だと思つたのよ。ちょっとキョン聞いてんのっ?!」

「へ？ あ…」

余計な事を考えていた為、全く聞いていなかった。が、ここでスマン聞いてねえ…なんか言ったら多分、オレの命が半分になる。

「……聞いてたつもりなんだが、その」

「聞いてたけど、その…が、何よっ!？」

口に出していく度に形の良い眉がどんどんつり上がっていき、機嫌がどんどん斜め方向に傾いていくのがリアルタイムで解る。

オレはなるべく穏便に済むよう、足りない脳味噌をフル回転して言葉を選んでいく。

「努力はしたんだがな、途中からオレの頭が追いつかなくてな」

「……途中つてどの辺よ？」

「えーと……」

とりあえず少しでも何かしら耳に残ってないか検索し、うる覚えにその辺りを口にしたら、

「ちよっ…このバカキョンっ全然最初じゃない！」

と、叱られてしまった。

仕方ないだろ？ こっちには色々と制約があってひた隠しにしなければならん側なんだから。

「…すまん」

「…もう」

…まあ、ハルヒの言い分も分からんでもないがな。

…

昼休み。

休み時間だけでは収まり切らなかったハルヒの講釈が更に続くのかと思われたが、昼休みの鐘が鳴るやいなやロケットスタートで教室を後にしていく。

ただでさえ朝に食った飯が腹から空っぽになった状態になる昼飯前で何処にあんなパワーがあるのやら…。

「よお、キヨン。朝っぱらからイチャイチャイチャしやがって何かあったのか？」

そんな朝と同じく見当違いな事を言いながら、谷口が隣から椅子を引っ張り出してオレの横に陣取る。

…お前は一遍、眼科へ行け。

「そして眼球を丸洗いしてもらえ。若しくはビー玉と入れ替えろ」

「キヨン、流石に谷口でもそれは可哀想だよ。別に悪気があって言った訳じゃないんだし」

谷口を一刀両断にせんと返したオレに国木田が前の席に座ってそう宥めてきた。

…どれだけ言ったところで谷口が傷つくようなヤツかよ。

「な。ひつでえなあゝキヨンは。このガラスのように繊細な俺のハートをバカにしやがってえ」

「ガラスねえ…」

「ははっ…擦り硝子で全然キレイじゃないかもしれないね」

…国木田も言うなあ。

流石に二人がかりで掛かれると谷口も普通に凹み始めている。

「…落ち込むなよ。ほれ、虎の子の卵焼きを進呈してやる」

「じゃあ、僕は金平ゴボウをあげるね」

谷口の目の前で弁当の中身にオレの卵焼き一つと国木田の金平ゴボウ一摘みが追加されていく。

「…唐揚げとポテサラもくれ」

「はいはい」

「唐揚げは断る。代わりに獅子唐を」

「唐揚げだ！ 唐揚げよこせえっ！」

と、オレと谷口は箸同士で鰐迫り合いを演じ、そのまま弁当のおかず争奪戦を繰り広げながら昼休みが過ぎていく。
しばらく一進一退の鰐迫り合いをしていると

「…いつもそんなアホな事やってんのアンタ達って？」

「っげ、す涼宮っ？」

「あ、涼宮さん。キョン借りてるね」

何かに気付いた谷口、国木田が入り口に向かって口々に言い、オレも殺気にも似た気配を感じてそっちを見やると予想通りの人物が立っていました。

「…あー。誤解がないように言うが、いつもこんな小競り合いをしているワケじゃないぞ？」

「してるしてないとかじゃなくて、ご飯食べる時ぐらい静かにするものなのよ、バカキョン。駄のなってるないガキじゃあるまいし」

「いや、これはな。谷口がおかず寄越せとか言っから躑てる最中だな」

「なっ、テメツ」

「ふーん…」

つかつかとハルヒはいつもの定位置に行くと思いつきし見下した視線を谷口に投げ、口を開く。

「…キヨンなんかに躑られてるって、バカ谷口もさっさと成長したら？ もう高校生なんだし」

「うるせっお前に言わ」

「何よ？」

「いえ、すみません何でもありません…」

反論しようとした谷口だが、ハルヒの上から目線+小石を見るよくな冷たい視線でそれを黙らせる。

…うおー、あんな風には見られたくねえー。

「キヨン。食べないとお昼休み終わっちゃうよ？」

一人、蚊帳の外へと離れ、早々に弁当を食べ終わっていた国木田がオレ達に時間が残り少ない事を告げてくる。

…谷口よ。

「あんだよ」

「一時休戦だ」

「じゃあ、今度ゲーセン付き合え。お前の得意ジャンルでフルボッコにしてやる」

「乗った」

返り討ちにしてやる。

オレと谷口はジツと睨み合った後、ゆっくりと離れて椅子に座り込むと黙々と弁当をかつ込んだ。

：

昼からの授業は滞りなく過ぎていった。

入れ替わりに入ってきた岡部が連絡事項を話し終えれば、残すは放課後。後は掃除当番のヤツが教室に残って、他は部活が帰宅なんだが

「キョン！　すぐに部室に行くわよ！」

「っぬお」

モノローグを急な引っこ抜きによって中断させられたオレなんだが、ハルヒのヤツが後ろから思いつ切り引っ張りやがって首が締まる締まる。

つか、ハルヒっ！　離せ！　首っクビが締まるっ。

「ん、何？ キヨン顔青いわよ？」

青いのは当たり前だ！

「頼むから奥襟を引つ張らんでくれっ息が出来んっ」

「じゃあ、こっち引つ張るわね」

そうそうネクタイ引つ張れば首は締まらない

「って、お前な。根本的に変わらんだろうがっ」

「ああもうつ！ それじゃあ、あたしが引つ張れないじゃない！」

…何でそんなに引つ張りたがる？

オレは溜め息を吐くと、とりあえず命に危険性のある辺りは避けるよう懇願する。

注意とかキツイ方に変えてもいいがそれだとハルヒが反発しかねるので飽くまでも譲歩。

「とりあえず首周りはやめてくれれば他はとやかく言わんから」

「…」

ハルヒは一気に不機嫌になりアヒル口になると、しばらくして急に腕を組んで何やら考え始める。

…悩むような事か？

「なあ。腕とか単純なモノじゃダメなのか？」
「え」

オレの言葉にハルヒが鳩が豆鉄砲を食らったような顔になる。

「腕ぐらいなら命の危険にはならんだろ」

「…そ、そうね。うん…あんたがそれでいいならそれでもいいけど」

…納得してくれたか。

何故かハルヒの顔が何やら紅いのが気になるが本人は至って元気だから大したコトないか。

「まあ、肘関節決めながら引つ張られたら別だが」

関節技に腕十字とか言う技があるからな。

「…お望みなら関節極めたまま部室に行くわよ？」

すみません冗談です。指で肘の筋肉筋をコリコリしないで下さい。オレは少々涙目になりながら平謝りしまくり、何とかハルヒのご機嫌を取り戻す。

「…冗談よ。つたく、何を必死に…あ、有希っ！」

ハルヒが前を向いた瞬間、大声を張り上げて手をぶんぶん振りまくる。

あ、こら。いきなり走るなっ。

「…」

走り寄るオレ達をジッと見つめて待つ部室の先住人こと長門有希。短めのボブカットに色白の肌、小柄な上に線の細い体躯…これで

あんな大量のカレーが収納できんだから、ヒューマノイド・インターフェースというのは解らん。

「有希も今から？」

「…そう」

ハルヒの言葉に長門がミクロ単位の頷きを返してくる。

正直、よく注視していないと分からないレベルの動作なのだがハルヒは分かっているんだろうか？

「一緒に行こっ」

と、言うやいなやハルヒは長門の腕をガシッと掴むとオレ共々に引っ張り始める。

長門は普通について行ってるが、オレは身長差がある為にそうはいかない。特に階段を下る時は

「ぬおっ」

「きゃっ！？ ちょっ何してんのよっこのバカキョンっ！」

思わずバランスを崩し、危うくハルヒに覆い被さりそうになり…
”危うく”だ。未遂だからソコを間違えないように…ひっぱたかれた。

「痛た…」

「…腫れてきている」

「いいのよっ。自業自得なんだから」

…だから故意じゃないと言っとるだろうが。

ヒリヒリとする頬を摩りつつ、そう弁解するのだがハルヒは全く取り合ってくれない。

「どうだか。案外異性と二人きりになっただら誰彼構わず襲うタイプに違いないわっ」

「言いがかりだ」

オレは無然と否定する。

…一体、何処ぞの無節操だよソレ。

「ったく…」

とぼとぼと先に行くハルヒ達について行く…ん？ 引っ張られてたんじゃなかったのかって？

「あんたに襲われたらあたし達みたいなか弱い女の子二人じゃ力で勝てないから離れて歩きなさい！」

だだよ。

…敢えて言わせてくれ。お前ら二人なら暴漢が100居ようが200居ようが、”ただの暴漢”である限り勝てるっつの。

部室へと続く階段を昇りながら溜め息混じりに胸中で色々呟いていると

「あら…みくるちゃん。どうかしたの？」

廊下に入ったハルヒが誰かを呼んだ。

「あ…涼宮さぁん、あの」

…何だ？

それはSOS団の妖精、現世する女神こと朝比奈さんで、いつもの可愛らしい声に何やら不安な声色を混じらせてハルヒを呼んでいる。

「何…あ」

何やらハルヒが部室のドアの前で目を丸くしている。

オレは訝しみながら足早にその後ろへと回り込むと、ハルヒの頭越しに部室のドアを見やった。
そこには…

「あの…」カード”か、ハルヒ？」

オレの確認の言葉にハルヒはドアにテープで貼り付けてあった”カード”を剥がすと皆の方を向く。

「…みたい、ね」

裏面を確かめてからオレ達が拾ったソレと同じだと頷く。

「”審判”のカード…みたいね」

「…あ、あの…」

眉を顰めていたハルヒに朝比奈さんが遠慮がちに口を開く。

オレは、どうしました？ と訊ねようと朝比奈さんの方を向いた時、視界に”ソレ”が入った瞬間、息が詰まった。

「そ、”ソレ”…わ、わたしが持つてる”コレ”と、いい一緒なんですけど…」

ビクビクとした手に握られていたのは正しくオレとハルヒ、そして部室のドアに貼り付けてあった”カード”であり、

「…わたしも持つている」

長門も持つているモノだった。

「……………これでまだ偶然とか言うの、キョン？」

「…オレはそう願いたいんだよ」

そんなオレのささやかな願いは結局届かず、忌々しいコトにただの偶然だった出来事がハルヒの力のせいで招かれざる怪異となってオレ達SOS団に降りかかってきやがった。

「…有希は…”女教皇”に…………みくるちゃんは”恋愛”のカードね」

「れん…あい…………ですか？」

「そ。ラバーズとも言っただけどね…………」

と、ハルヒの説明を聞いた朝比奈さんが色々と質問し始め、何やらタロット占いについての教示みたいな事になっている。長門に話し掛けるならハルヒの気が朝比奈さんに向いている今の内だな。

オレは誤解を招かない程度に少しハルヒ達から離れると長門に小さく手招きをする。

「…なに？」

「その”カード”のコトなんだが、やっぱり拾ったのか？」

「…玄関を開けたら目の前の欄干にテープでぶら下げられていた」

ぶら下がってましたか？

「ぶら下がってた」

少し小首を傾ぎながら、オレを見上げ、言った言葉をそのまま返してくる。さながら言葉を覚えてたの子供のような素直さだ。

…そのまんまの純粹さでいてくれよ？ 長門。

「…頑張る」

眼差しに確固たる決意を持って頷く。

気付けばオレは妹に対して頭を撫でるように長門の頭を優しく撫でていた。

「…っ！？ す、すまん、つい」

「…いい」

特に気にした風もなく長門はハルヒ達の方を向くと二人の中へと加わりに行った。

長門はああ言ったがその表情は心なしか緩んでいたように思う。もしかしたら気のせいかもしれない…が、本当なら良い兆しだ。

「キョーンっ？」

「ん？」

どした、ハルヒ？

「も一回、あんたが”カード”拾った時の状況聞いときたいんだけど？」

…は？ 変なコト聞き直すんだな？

「いいから。さっ、何処で拾ったの？」

…あの登り坂の半ば辺りだが？

ハルヒはオレの証言を聞くとニンマリと笑うと朝比奈さんの方を向く。

「みくるちゃん」

「ふえ？ え、えと…玄関を開けた時に門のこつち側に」

と、言いながら朝比奈さんは自分の胸元に手を置いた。どうやら”カード”は敷地側に有ったらしい。

…怪しからんな。朝比奈さんの家の敷地内に不法侵入者とはっ。

「ま、それも気になる所なんだけど。で、有希」

「玄関先の前の欄干」

さっき聞いたな。

…で、ハルビよ？　それが

「あたしも玄関先」

…えーと

「はい。あんたが”カード”を見つけたのは？」

猫なで声というなかなかのレアな声色で同じ事を何度も訊いてくるハルビ。とは言え、オレはそんな事を気にしている余裕はない。流石にコレは…

「ま、待て。オレの何をどうしたいのかは知らんが古泉が来てからにしないか？」

「どうして？」

「どうしてって…」

べ、別に深い意味はないぞ？

「じゃあ、古泉くんも玄関先に”カード”があつたに賭けるわね」

…言うと思つたぜ。

一体、何を賭けるのかは知らんが多分、古泉のヤツも玄関先だろう。

「…おや？　部室の外で皆さん談笑とは珍しいですね。何のお話ですか？」

「あ、古泉くんナイスタイミングっ」

噂をすれば何とやらか。古泉の奴が無料スマイルを浮かべながらこちらへ向かってくる。

…古泉、

「…この”カード”見覚えあるか？」

オレはポケットから”カード”を取り出し、古泉に見せると…

「それは…はい。僕も持ってますと言うより拾いました」

玄関先で、と付け加えるとカバンから裏面の柄がオレ達と同じ”カード”を取り出して見せてきた。

「これで間違いないわね。これは何かからの啓示よ」

ハルヒがひたすらにマズいコトを口走った！

「いや、だから偶」

「キョン。あんたも寝ぼけたまんまなんかで外出なかったら、この”カード”…玄関先で見つけてたわよ」

反論を許さない口調でオレの言葉を遮る。この瞬間、もうこの現象を覆すのは古泉や長門でも無理だと直感した。

何故ならここまで物的・状況的証拠が揃ってしまっているのと同じ時に、二人がこの現象に関して全く何も知り得ていないという事に気付いてしまったからだ。

長門が仕掛けた仕組みなら、さっきオレが訊いた時点で種明かしをしているし、それにハルヒもさっき言ったように、

注意していればオレも玄関先で”カード”を拾っていた。

確かにそう思う。だが、オレはそれに気付かず、拾ったのはその辺の道端。

ここでもしオレに”カード”を拾わせようと第三者が仕掛けたのなら長門が気付くのだ。だが、周りを見た時には誰も何も無かった。長門はSOS団の皆に危険が及ばないよう見守ってくれている。だが、さっきの会話ではそこに一切触れなかった…つか、そう言や自分の時に既に首傾げてたな。

古泉もそうだ。

オレがカードを見せた瞬間、少しだが片方の眉を上げやがった…あれは完全に不確定要素が絡んできた時の驚きの表情だ。もし長門の表情を読むのに鍛えられてなかったら分からなかった。

それは古泉の野郎が把握していない…つまり、”機関”の仕込みじゃないという事。

「…古泉くんは……”法皇”のカード」

ハルヒが古泉の”カード”が何なのかを呟くとお浚いをするように今までの絵の内容を口にし出した。

「キョンが”愚者”であたしは”世界”…みくるちゃんが”恋愛”に有希が”女教皇”、古泉くんが”法皇”……んで、部室に”審判”か」

顎に指を当てて考えるハルヒ。

「どういう意味なのかしらね、これ？」

オレが不安に思う中、ハルヒが首を捻りながらも何やら愉しげに考え込んでいる。

これが一体、何に発展するのはオレには解らない…正直、ここまでの流れを考えると長門や古泉に訊いたとしても好転するような材料は得られないと思う。

ただ言える事は…

今までの日常が終わりを告げるかもしれない

そんな予感めいたモノ…今までオレが積み上げてきた経験測がそう告げていた。

涼宮ハルヒの仮面 『タロットが導くその先は?』 (後書き)

如何でしたでしょうか！。

少しハルヒがデレ強めな感が出ているような気がしなくてもないような？

とりあえず、こんな感じで頭に思い浮かぶ事があり次第、書いていきますんで宜しくお願いします！ (最敬礼)

涼宮ハルヒの仮面 『タロットが導くその先は？』 おまけ（前書き）

おまけです！

登場人物にタロット全部振り分けました！

あと、もし続けて書くならこんな感じかなっていうダイジェスト版もついでに。

ではでは、どぞー

涼宮ハルヒの仮面 『タロットが導くその先は？』 おまけ

その後、オレ達の周りにも”カード”を拾った人物が現れ、それはSOS団関係者全員と深く関わりがある人達だった。
…内容の内訳はこうだ。

妹…”悪魔”のカード

吉村美代子…”星”のカード
ミヨキチ

谷口…”戦車”のカード

国木田…”運命”のカード

鶴屋さん…”剛毅”のカード

朝比奈さん（大）…”節制”のカード

上記に関して驚いたのがうちの妹と朝比奈さん（大）に関してだ。未来の朝比奈さんは何故か”恋愛”のカードではなくなっていて、理由を訊ねたら微苦笑を浮かべて、いつものヤツで返されたな。妹は…いまいち分からん。当人も特に気にした風もないからオレも気にしないようにした。

…あとは、

森さん…”女帝”のカード

新川さん…” 太陽” のカード

阪中…” 月” のカード

喜緑江美里…” 隠者” のカード

生徒会長…” 皇帝” のカード

が、北高サイドの内訳だ。

そして佐々木との再会により、コレは佐々木達にも飛び火し、OS 団から始まった怪異は更なる広がりを見せた。

佐々木…” 世界” のカード（だが、ハルヒのカードとは異なり、絵柄の人型が” 女性” と差異があった）

橘京子…” 正義” のカード

藤原…” 刑死者” のカード

九曜周防…” 塔” のカード

あと朝倉が住んでいた505号室なのだが、その扉に皆と同じものが貼り付けてあったのを長門が持つてきて判明した。

…それが、

朝倉涼子…” 死神” のカードと” 魔術師” のカード

だった。

既に居ない奴に対してまでこの念の入りようとは頭が下がる。が、何も起きないままのクセにこうやってオレ達に関わった皆にまで広がっていきやがった。

皆も表向きは平静だが長門達や朝比奈さん達、古泉達はなまじ万能・有能であり、非凡な為に情報一切が不明で不安がってる。

…くそ。一体、何だってんだよ？

…

突如として原因不明の昏睡状態となったハルヒと佐々木。

”組織”との協議の結果、規模の理由で”機関”直轄の病院へと運び込まれ、出来る限りの方法で覚醒を促したが成果は得られなかった。

”機関”、”組織”双方の上層部は解決策を見いだせず恐慌状態。末端への指揮機能は麻痺してしまっており、体制としてはほぼ崩壊。…神人の出現が確認されていないのが不幸中の幸いという状況か。しかし、その事があって古泉と橘の二人はこの混乱の中でずっとオレ達と共にいることが出来るというのは皮肉だろうか。

長門達も末端との理由からか、統合思念体と天蓋領域からはハルヒ達から離れるなというお達しらしい。

朝比奈さんは未来との連絡は途絶したせいで意気消沈し、同じく途絶しているはずの藤原は自分を余所に何も言わないまま彼女の傍に一緒にいる。

「ハルヒ…佐々木…っ」

オレにしても今回の事はあまりにも唐突で、あまりにも無力な事を痛感するしかなかった。

オレは何かの拍子に目が覚めるかもしれないからという理由で今日も一日中、ハルヒと佐々木が眠るベッドの傍らで椅子に座り、しばらく仮眠を取るため目を瞑っていた。

そしてふと目覚めた瞬間、オレが感じたのは違和感だった。

私服だったはずが制服に変わっており、

「オレの…部屋？ まさかつ」

見回した景色はいつもの見慣れた自分の部屋でしかない。だが、確信を持って部屋のカーテンを広げた先に見えたモノは予想していたモノとはかけ離れていた。

「閉鎖…空間……だよな？」

そこにはハルヒや佐々木の閉鎖空間で見た均一性は無く、薄暗い灰色と薄明るい白色が中途半端に混ざり合い斑模様と化した空だった。

「なん…だ？」

何故と例えようもないほどに募っていく不快感。

あの時、佐々木の中で感じた安心感は何処にも感じられず、かと言ってハルヒの中で感じた不安感もない。

あの神人の姿もない。何者も居ない閉鎖された空間…

オオ・オ・オ・オ…

なのに…

オオ・オオ・オ・オ・オ……ッ!!

空間を揺るがす、何者かの咆哮が響き渡ると同時に視界を過ぎる、一陣の赤い閃球と…

『古泉さん、危ないっ避けてえっ!』

若い女性の声が響き渡った。

誰だと思った時、地上から発した緑色の一閃が赤い閃球を掠め…

「…は？」

それが地上へと落ちる。

明らかに狙って放たれた光だと一瞬では判らなかった。

「こ…いずみ？　おい、古泉……古泉いつ!!」

気付けばオレは家を飛び出し、古泉が落ちたであろう場所へと必死に向かった。

静寂に支配された街中をひた走る中、

「…違うっ」

オレは自然とそう呟いた。

…認めたくなかったのだ。

実際に閉鎖空間で誰かが傷付くという映像を、ハルヒや佐々木がそんな事をするはずがない。だから、さっきのアレは見間違いなのだ。

オレは間違いであってくれと懇願しつつ、古泉が落ちた辺りに繋がる角を曲がった。

「っ?!」

そこで見たモノ…

「な……………何だよコレは」

そこに居たのは街中に隠れるサイズの神人ではなく、まるで山積みにされた泥のようなモノだった。

それは命を持って動き回っていて、どこまでも黒い塊は触手のようなモノを生やし、地面に突き立てて掻いては自らの身体を前へと進ませ、辺りを這いずり回っていた。

そして、その先…遙か遠くに満身創痍でありながらも立ち上がり、また紅く光り始めた古泉が居た。

「……………こ、古いずぶえっ?!」

何とか変な生き物の間をすり抜けてでも古泉を助け出そうとまさに駆け出そうとした時、視界の外から何かに横殴りにされて壁に激突していた。

『へ…古泉さん以外に…せ、生体反応なのです。ちょ…そこに居るのは誰ですよ？ 答えて!』

「…な…んだっ…よ、くそっ…痛え…っ」

全身を襲う激痛に意識が飛びそうになるが、頭に響く何処かで聞いたような声のお陰で何とか保ち、自分に近付いてくる例の泥の化け物を見やる。

「く……るなあ……っ」

オレを吹き飛ばしたであろう、その化け物から逃げようと身を起こそうとした時、制服の胸元から”カード”が落ちた。

”愚者”のカード…オレが拾った”カード”

そこに自分が拾った”カード”を嬉々として見せている時のハルヒの面影が重なる。

「…っ」

腕で身体を支え、何とか身を起こそうとする。
オレにはもう逃げなければという意識はなかった。あるのはこの中で勝手に暴れまわっている泥の化け物への怒り。

「……けよ」

この閉鎖空間で勝手に暴れまわり、仲間である古泉を痛めつけた事への怒り。

「出て……っよ」

現れやがったタイミング、暴れまわっている理由…全てが、今回の原因がコイツらのせいだと直感した。

オレは思い出していた…初めて起きた、初めて自覚できる不思議な出来事に笑顔を輝かせたハルヒと

「出てけよ…っ」

”カード”の経緯を説明した時に見せた、どこか困りながらも愉しげだった佐々木の笑顔を。

オレは何とか身を起こし、壁に凭れかける。

「…二人の、中からっ出て行きやがれ…っ」

そして今まさに押し潰さんと、触手で身体全体の前半分を持ち上げている化け物に対して睨み付ける。

自重に耐えられなくなったのか、支えていた触手が気味の悪い破裂音を上げ始めた。

「出ていきやがれって言うてんだろっクソ野郎おお!!」

迫ってくる象みたいにデカイ泥の化け物の腹に対して有らん限りの声で叫ぶ。

オレからしてみればやけにゆっくりと落ちてくるソレは叫んで見た所でどうにもならないモノであり、ただでさえ壁に叩きつけられてろくに動かない自分の身体では何をしたら所で圧死は免れない。

「……………つくそつたれえっ」

無力さを痛感しながらオレは奥歯をグツと食いしばった。

「…っ」

無駄と知りつつも目を閉じ、身体に力を入れて衝撃に耐えようとしてる自分。意味なんかないと分かっているのに。

「…くそ」

死を覚悟すると周りの動きが極端に遅くなんだよな…つか、遅えっ！ 殺すなら早くしろ

「…っ？」

あまりの遅さにオレはソツと目を開くと自分の周りがやけに輝いていることに気付く。

…死んでない

「生きて…る」

自分の周りが何やら輝いているのが気になったが、それよりも何よりも先に押し潰そうとしていた化け物を見やったら…

「う、お…っ！？」

その化け物が消え去る瞬間だった。

そして、輝いている原因もそこにあった…

「…ハ…ルヒ…？」

オレは敵を消し去ったその輝くソレがハルヒの力かと思った。

『我は汝…』

でも、それは違った…

『汝は我…』

何故違うのか？ と問われたら説明出来なかった。ただ言える事は、コレは佐々木の力でもない…ということしか言えない。
今なら古泉が言っていた意味が解る…説明は出来ないが分かってしまうのだから仕方がないのだと。

『我は汝の心の海より出でし者…』

今なら解る…あの泥の塊が本当の意味で敵であるという事を。

『汝が呼び掛けに応え、馳せ参じた…』

もう、辺りにいるあの敵達は雑魚でしかない事を。

オレはゆつくりと立ち上がると光輝く元へと手を翳した…身体に痛みはない。

もう、何をすればいいのか全て解った。

「コイツらを薙ぎ払え…」

オレは翳していた手の中にある光の源であるソレを握り締め、そして…

「行け…っ」

ソレを…”愚者”のカードを握り潰した。

「『イザナギ』っ！」

握り締められた手から今まで”カード”として形作っていたモノが溢れ出し、オレの前で真のカタチへと変えていく。

…オレは確信した

「これで…」

この力で

二人を助ける事が出来る…と。

涼宮ハルヒの仮面 『タロットが導くその先は？』 おまけ（後書き）

合間合間にP4をプレイしてます……逆転現象は起きてませんよ？
ホントに起きてませんよ？（あせ

あと、本当に単発で終わらせるのでその辺りはご理解のほどお願いします（頭下げ

涼宮ハルヒの闘牌 『雀鬼なキヨン』（前書き）

一発ネタです。

ふと、キヨンの財源の出どころが気になって思い付いたネタです。

ではどうぞー

涼宮ハルヒの闘牌 『雀鬼なキヨン』

我らが団長こと天上天下唯我独… もとい涼宮ハルヒによってS O S 団が発足して約一年。

この一年でオレの足はまるで飛び立っていた伝書鳩が帰巢本能で元の場所へと戻るが如くS O S 団の部室へと向いている。

何というか… 生活習慣とか中毒症状とかアイデンティティの一部だとか… そんな感じでオレは部室へと向かう中、

「はぁ… ……」

溜め息をつく。

ここ最近、溜息が出まくって仕方がなかった。
その理由は…

「遅いつ！ 罰金っ！！」

「ここ、キヨンの奢りだからね！」

「じゃっ、ここも払っというてね！！」

「へいへい…」

と、まあ上記の諸事情により紙幣から硬貨に至るまで、まるでジェットエンジンでも積んでんじゃねえか？ の如く財布の中身から金が飛び出してってる。

実際、財布の中は札入れは羽毛の如き軽さしか無いと言つこと、砂利銭の重みしかない。

「何よ、キヨン。財布の中身見て溜め息なんか出して」

「…ん？ ああ、」

オレと連れ立って歩いていたハルヒ。

お互いに掃除当番ではなかったのでオレは半ば強引に引っ張られて連れ出されたんだが、あまりにオレが溜め息ばっかなせいか、やたら不機嫌そうに訊いてくる。

…いや、オレってスゴいよなつて。

「あんたの何を持って何処がスゴいつてのよ」

「いや。あれだけ奢らされてんのに、オレはなあんも文句も垂れずに毎度毎度財布開けてんだから」

「だから遅れなきやいいんでしょうがっ」

そんなオレの物言いにハルヒは噛み付いた。

「これ何回目…いや、これで何十回目よ…ったく」

「…まあ、そうなんだが」

普通にお前らが早すぎんだよ。

「つか、一体、何時に集合場所に来てんだ？」

「教えるわけないでしょ。何の為の罰ゲームよ」

「罰ゲームねえ……正直、何とかなんないかソレ？」

「却下よ。ま、それがイヤなら一度でもいいからあたし達より先に来る事ね」

と、言うとはルヒは不敵な笑みを浮かべてオレを見上げてくる。

そこには絶対の自信と、やれるもんならやってみなさいという挑戦的な含みがありありとみえる。

…はあ。

「善処してみるさ」

「ま、無理でしょうけど」

…言い返せんな。

ケラケラと笑うハルヒを眺めながら長い溜め息を吐く。

しかし、オレの台所事情はかなり切迫しているのは事実であり、これを改善する策を何とか捻りださないと…我が身を切り売りするしか

「あつ、前方に古泉くん」

「おや……涼宮さんも今からですか」

「そ。キョンがあまりにトロいからさ、ずっと急っついてんの」

そこで何でオレを前に出す？

そんなハルヒの説明に古泉はその0円スマイルを30%増量にしてオレへと向けてくる。

…あんだよ。

「いえ。別に何もありませんよ」

「…その顔は何か言」

「ねっ、古泉くん。それ何持ってるの？」

オレが言いかけたところでハルヒが思いっきり言葉を被せてくる。改めて見やると確かに古泉がカバン以外にやけにデカいカバンのようなモノを持っていた。

実はオレは一目見てそれが何なのか分かったりしたが、パツと見て気付いてないハルヒは興味深々のようだ。

「あ、これですか？ これ、中に雀牌が入ってるんですよ」

「へえ麻雀牌入ってるの？ でも、部屋に出来るようなテーブルないわよ？」

ハルヒが部屋の内装を頭の中で思い浮かべ、確認しながら頷いている。

「ハルヒ、アレな。実はこのカバン自体が折り畳み式の簡易台になってんだよ」

「…へ？ そうなの？」

ハルヒにしては珍しく目を丸くしている。

テーブル云々と口にしてたから雀卓ぐらいしか見たことがないって事か。

「手積み出来るテーブルか全自動麻雀卓しか見たこと無かったわね。へえ…こんなのあるんだ」

感心したように呟いてスルーしそうになるが、全自動とか手積みとか身近に見る機会があるのか、ハルヒよ？

「それにしても古泉くん、コレ。出来るの？」

「ええ。バイト先で良く。それもあつて最近、部室でのゲームがマンネリ気味でしたからね。趣向を変えてみようかと」

そこにはいつもの0円スマイルではなく、ましてや今までの無根拠な自信でもなく、裏打ちされた確固たる自信が滲み出ているのが窺える。

どうやら蓄積された負けの鬱憤をコレで返す気のようなのだ。

「ね、わたし達も加わっていい？ まさか4人でするものをタイマン勝負でやるなんて詰まんない事しないでしょ？」

4人打ちが基本の麻雀をタイマン勝負で、な。色々な調整をせにやなら…んん？ わたし達？

「…わたし達って誰入れんだよ？」

「可能性としては…鶴屋さんですか？」

古泉が一瞬、考えたと思えばふと呟く。

…鶴屋さん、か。実際はどうかは判らんがデタラメに強そうだな。

「それもいいけど。今回はいつものメンバーだけでやるのよ！」

ハルヒの言葉を真に受けるならその中には朝比奈さんも入ってる

って事になる。

オレは何とはなしに朝比奈さんが牌を握る姿を思い浮かべてみる……が、あー、朝比奈さんが小首を傾げてハテナを頭いっぱい浮かべてらっしゃる姿しか思い浮かばん。

……ハルヒよ。朝比奈さんは場違い感全開だぞ？

「……バカキョン。みくるちゃんはそーいうのはしちゃイケないの。解る？」

「……あ、萌え担当だからか？」

「ピュア担当でもあるわよ！ 多分、索子のー索なんか見せたら……あ、鳥さんですか？ 可愛いーって言うわっ絶対！」

……と、すると残るは

「長門さん……ですか？」

古泉が感慨深げに呟く。

長門有希……対有機なんたらインターフェースは麻雀を知っているのだろうか？ と、オレは朝比奈さんに続いて長門が牌を握る姿を想像してみる。

東一局……捨て牌が三段目に入り、ツモ番が来た長門は無表情で山から牌をツモる。指の腹で確認しただけで柄すら見ずにそれを静かに横に置き、徐に手牌を倒して平然と純正九連宝燈を上がっている姿が浮かんできた。

……オレはそんなワンサイドな展開は勘弁だ。

「ま、確かに有希ってちゃんと打てて且つ普通に強そうよね。でも、そんなのって実際打ってみないと分かんないじゃない！」

「うーん…」

ハルヒの言い分は分かるが…

「…では、麻雀をする面子は僕達二人に涼宮さんと長門さんを加えた4人ですね」

「そ」

オレが顔をしかめている内に古泉が面子を確認する。
ハルヒは何やらご機嫌だ。

「ふふん、楽しくなって来たじゃない！ さっ、善は急げや思い
たったら吉日！ 部屋に急ぐわよっ！！」

「っと！」

「っ、は、ハルヒっ引っ張んな」

右肩上がりにテンションが高まったハルヒに引っ張られて引きずられていくオレと古泉。

放課後の学校で麻雀という少々、健全とは言いが不意に舞い込んできた好機にオレは内心で拳を握った。

…

「あ、キョン。それポン」

ハルヒがオレの捨て牌を鳴き、配牌から一枚を捨てる。

部室に着いたら何のかので今まさに対局中だ。面子は我らが団長にオレと古泉に長門の4人…朝比奈さんはオレ達の傍らで見学しながらお茶を注いで下さったり、お茶請けを用意して下さったりと給仕役をせつせとこなしてらっしゃる。

「…ツモ」

長門がツモ牌を横に着けて和了りを宣言すると手牌を倒した。

「1300・2600…一本付け」

「100点釣りくれ」

オレは1000点棒三本を長門に渡し、お釣りを貰うと軽く伸びをする。

さて、何から話そうかね…

「ちょっとキョンっ、ダレてないでアンタも混ぜなさいよ！」

へーへー。

そだな、何でオレが麻雀出来るかつてのから話すか。

初めて牌を握ったのはどの頃だったかな。

小学生の頃は田舎の道が無邪気に走り回っていたオレだったが、中学に上がった日を境に見慣れきってしまった景色から何の刺激を得られず、田舎に帰っても家でゴロゴロすることが多くなっていた。その為、同じく帰省してきた親戚達と接する機会が増え始め、ある程度の人数が揃って来ると親父達は決まって麻雀をし始めのを知った。

「リーチです」

牌同士がぶつかって起きる、全く聞いた事がなかった耳慣れない音。

「…カン」

「うつ…そこ止められるとは」

「これもカン…」

いつしかその音に興味を持ったオレは麻雀が始まると決まって親父の斜め横に座り、対局を見学するようになっていた。

「か…空テン」

「…これで古泉一樹の和了りは無くなった」

牌を握るキツカケとしては…思い出した、二年に上がる前、正月の帰省だ。

恒例の麻雀大会中、親父が暫しの長考から切ろうとした牌を見たオレが、あ…っと声を出したのがキツカケだった。

オレは親父側から親父の手牌と4人の河の捨て牌を見て、それは危険牌だと気付いた声であり、案の定親父は放銃し、結果としてラスを引いた。

「…有希、結構えげつないわね」

「はあ…巡目も浅い内にもうツモ切り連打ですよ」

その読みを買ってか、親父は一度オレに一局を丸々打たせてくれ

た。

初めての対局な上、舞い上がってしまったオレは動きがガチガチになり、手牌を一部倒すわツモる時に場所を間違えるわ、ツモった指が山に当たって次の人のツモ牌をバラすわと、今思い出したら恥ずかしさで泣きたくなるような麻雀デビューだったな。

「強く生きる古泉。つか、それロン」

「はあ…これでトビましたね。ハコワレですよ」

「とりあえず裏返してマイナス分乗せとけよ」

それからというものの正月中、機会があれば親父の代走をするようになり、中二になってからのGW休みに帰省した頃には大人達に混じって麻雀をするようになった。

もう緊張からガチガチだった動きは形を潜め、周りに迷惑を掛けてしまうような失敗もなくなった。

「良く判らないんですけど…キョンくんはこの”まーじゃん”というゲーム、強いんですね」

「…ホント、みくるちゃんの言うとおりね。キョンのクセに」

「そうか？ 実家に集まる親戚の中じゃあ実力は下から数えた方が早いと思ってんだけどな」

これはマジだ。

そのGW休み最後の日、オレはその前の数日で二位を大きくつき離す総合大トップを取った時、卓を囲んでいた親戚に賭けを持ち出された。

内容はこうだ…帰る時間までの間、この総合トップを守り抜いたら駄賃プラス浮いた成績分の上乗せするという。その代わりに二位なら駄賃のみ、三位に転落した時点で駄賃は無し…というモノだった。

駄賃の額を聞いた時点で中学生時分では破格のお年玉クラスの駄賃をある意味ノーリスクで貰えるというチャンスにオレは歓喜して首を思いっきり縦に振ったのを覚えている。

「ふう…これならあなたに勝てると思っていたんですがね」

「…残念だったな」

が、結果はボロボロだった。

お袋から帰り支度を促された時には200近かった総合トップがダントツのラス、トップの時の倍近いマイナスを叩いた。

オーラスの時なんかはもう半べソ掻きながら麻雀打ってたのを覚えていて…卓囲んだ親戚達は泣いたオレをずっと慰めてくれてたなあ。

「…次はオーラス。親はわたし」

「あ、有希サイコロ振るのストップ。その前にみんな点数申告しなさい！」

「では僕から……」

その帰り道の道中では賭けを知らないお袋に頻りに理由を訊かれたが、内緒且つ非公式の賭けだったのでバレるわけにはいかなかったオレは自分なりにシラを切り通し、親父のフォローも受けてその場をやむやにしたつけ。

それ以降と言うものの、帰省の最終日はボーナスチャンスとなった。

夏休みの長期帰省の時は考えてからの打ち方を意識し、抜け番の時は一番強いと感じた親戚の後ろに陣取ってギヤリったりもした。その時も結果は散々だったが初回と比べればかなりマシなもので、手応えを感じたオレは家でも練習をするためにゲームもその手のモノ…打ち方の採点をしてくれるヤツ…を買った。

「…リーチ」

「っと。おや…ふふ、通らば僕もリーチです。振れば高いですよ？」

「二軒リーチ？ って、来たっ。ふふん♪ わたしも通らばリーチ！ キョン言つとくけど全員リーチでも流局せずに続行よっ！」

「そうかよ。が、生憎とオレはリーチには程遠いんだよ」

結果、

「三家和了もありだからね！」

「分かってるっつの。まあせいぜいオレの事は気にせず三人で打ち合ってくれ」

中二最後の正月にその目標は達した…初めてトップを維持し、そのまま帰る段階に入る事が出来た。

その時に手にした駄賃が郵便の定期預金を作るキツカケになり、高校入ってすぐのGWと夏休みでは大人気なく本気モードの親戚達を相手に辛くも逃げ切ったその分も含め、永らくオレの通帳には収入が刻まれてきてたって訳だ。

「んー…違う」

だが、最近はハルヒの罰金刑のせいで財布が軽くなる一方の今日この頃では、その通帳に支出が増え始めてきた。

「…白」

「……ツモりませんね」

「ちよつと振り込みなさいよ」

「断る」

が、今回のコレはそれを挽回するチャンスが見えてきた。

狙うは古泉の財布…常々、“機関”から資金云々の話を古泉は持ち出して来たが、そんな出所不明のグレイマナーをそのまま素直に受け取るのには抵抗があった。が、こうしたゲームを通し、古泉のポケットマネーからなら幾分か和らぐ。

「ハイテイなんか…付くなよ」

後はいつ、それを切り出すか。

オレはラス牌を河に捨てるが和了りが誰も居ない。

「最後まで無駄ツモ……」

「ああ……テンパイ止まりっ」

「はあ……僕もテンパイです」

流局し、そんな皆が口々に残念そうに手の内を明かしていく中、

「オレもだ」

「なによ。あんたも？」

手牌を倒し、テンパイを宣言するとハルヒがオレの手をしげしげと見やる。

「…あんた、三軒リーチの檻中でよくテンパれたわね」

意外だと言わんばかりの表情だ。
…そうか？

「まあ、アガれなきゃ意味ないだろ。その辺は」

「…キヨンのクセに何か生意気だわ」

「とは言っても、僕達の待ち牌を的確に止めた上でのテンパイですからねえ」

ま、受け捉え方はそっちに任せるさ。

「で、えーと…供託はトップの総取りだから……まんま、ハルヒがトップか」

「有希とキヨンは同着で」

「同着は上家が上だ」

「じゃあ…トップはわたしで二位がキヨンで三位が有希にラスが古

泉くんね」

結果を聞いて古泉は大仰に肩を竦めて嘆息する。

「いやはや、これなら勝てると思ったのですが…燦々たるモノですね」

「それにしてもキョンが変に強いのが気に食わないわ。イカサマしてないでしょうね？」

んなもん、出来るか。

「一通り見せて貰ったことはあるがオレに出来るのなんか一つも無かったよ」

「…あんたの親戚に興味が沸いてくるわね」

ハルヒが何やら不穏な事を言ってくる。

正直、勘弁して欲しい。帰省中がオレにとって唯一の安息日であり、その安息の地にまでハルヒが食い込んで来たなら、オレは過労死してしまう自信があるぞ。

「それにしても古泉くん、自信たっぷりだった割にモロいわね」

「彼も含めてお三方の実力は僕の予想以上でしたからね。いやはや、井の中の蛙とは良く言ったものです」

…井の中の蛙、ね。

古泉の言葉にオレは少々懐疑的だ。

理由として対局中にやたらと自信ありげだった古泉の打ち筋を見

ていたが時折、妙な違和感を感じた瞬間があったのだ。

…まさかな。

「なあ、古泉。バイト先じゃあ、どんな人と打ってた？」

「そうですね…皆さん、僕より年齢が上の人ですから、先輩方や上司と打つことが殆どです」

探り…と言っても大方の予想通りか？ 間違いなく森さんや新川さん達の事だろう。

これで違和感の合点がいったぜ。

「じゃあ、打ってても気い使ってばっかだろ？」

「毎回と言うわけではないんですが、ね」

決定だな。

…古泉め、接待麻雀として打ちやがったな。

「はいはいっ、無駄話はおしまい！ 今ならまだもう半荘出来るからちやつちやと始めるわよっ！」

…よし。

「ここらで差し馬なんてのはどうだ？」

オレは計画を実行すべく、まず賭けをするよう提案した。が、

「…何よ。さつき二着だったからって余裕ぶっ扱いてんの？」

睨みを利かせてオレを見てくるハルヒ。

その眼光は此処が場末の雀荘だったならば今にも有り金を置いて逃げ出してしまいたくなるよう剣呑さだ。

…正直、怖え。怖えが背に腹は変えられんし、オレの財布はもう限界なんだつ。

「ああ…余裕がまさせてもらつ。ウマはワン・ツーでレートは3だ」

「3…それ30円じゃないですよね？」

アホか。300円に決まってるだろ。

「ちょ…お金賭ける気？」

流石のハルヒもお金を賭けるといふオレの提案に驚いている。

…ああ。

「やっぱ、金賭けてないと本気出ないんだよ」

「それ本気で言ってるの？」

今までが本気じゃないと聞いてハルヒは一気に眉根を寄せて訝しみます。

「あの…賭け事はイケないと思いますけどお…？」

朝比奈さんが弱々しくもそう注意して下さったが今回はその言葉には従えなかった。

「まあな。が、ウマを張るのはお前じゃなくて古泉だけだな」

「おや…僕ですか？」

「ちょっと…そんな判りきつた勝負吹っかける気？」

…実はそうでもないんだよ。

「古泉、次は本気出せよ？」

「…」

「へ？」

まさかバレるとは思ってなかったのか、古泉はいつもの笑顔を貼り付かせたままこめかみに汗を伝わらせている。

…やっぱりな。

「ちょっと古泉くん。いくらわたしが団長だからって手加減なんてしても全然嬉しくないわよ？ さっきの半荘だって全力だったんだからっ」

「い、いえ、手加減をしていたわけでは」

「…わたしも対局中に妙な違和感を感じた」

お、長門もか。

「な…長門さんまで」

逃げ場を失った古泉はいつもの笑みに誤魔化し笑いも混じっている。たものがちよつとした狼狽に変わっている。

…さて、で？ どうすんだ？

「いいわっ乗ったわよ。ついでにぶっ飛ばしとぶっ飛びのダブルコンボもね」

不敵な笑みを古泉に向けながらハルヒがオレの案に乗ってきた。
これですべての準備が整った。

「古泉…気合い入れるよ？ さっきみたいなハコテンでラス引いて
みろ、諭吉が出ちまうぜ？」

すると、途端に古泉の空気が変わった。

珍しい事に古泉のソレはハルヒに負けず劣らずの不敵な笑みだ。

「…宜しいでしょう。皆さん、覚悟して下さいね」

望むところさ。

「そだ、ハルヒに長門」

「あによ」

「なに？」

「イカサマすんなよ」

オレの言葉にハルヒはそんな事しないわよと叫び、長門は無言で頷く。

さあ、楔は刺した。

「もう一半荘と行くか」

古泉は本気モードでハルヒは神様パワー無し、長門も宇宙パワー
無しの自分の地力だけの勝負…これでいい勝負になる。

じゃ、始めるぞ。

涼宮ハルヒの闘牌 『雀鬼なキヨン』（後書き）

雀鬼キヨン…あれ？　なんか格好良い響きが…（笑）

えと、かなり猛ダッシュな展開ですが、上手く書けたと自分では思ってます（ぐっ

あ、ルールのなツツコミは勘弁して下さい…あと、専門用語みた
いなのは素人には敷居高いよつというのも（あせ

では、また不定期ですが、今後とも宜しくお願いします（礼

innocent blue (前書き)

悩んだ結果、こちらに貼ることにしました。

えー、連載だったら主タイトルはやっぱ『朝倉涼子の憂鬱』でしようかねー…朝倉涼子中心、グサデレなしのキョンデレな朝倉さんです（笑

感想の反応によって連載に移行しようかを考えますんでそれまでに更なる量書き貯めておくつもりです…あ、出来れば感想でお願いします。評価は連載移行が決まった時まで取っておきたいので…って、これで感想来なかったらどうしよう（あせ

そろそろオロオロな躁鬱状態な感じですが、賛成反対の感想お願いします。では、どぞー

i n n o c e n t b l u e

…どうなつてやがる？

まず最初に浮かんできたのはここ一年で口癖になりつつある疑問符だった。

オレは確かに昨日一日、眠気で重い足取りで学校へと赴き、進級するもあまり変わり映えのないクラスメートと会話し、授業をハルヒによるシャーペン刺しに耐えながら睡眠学習し、放課後は放課後でハルヒによつて振り回されるといふ日常を終えた後、疲れた身体に鞭打つて家に帰つて妹をあしらいつながら晩飯を食つてひとつ風呂浴びて自分の部屋、寢床でもつてオレは就寝したハズだった…なのに、

「…何処だ、此処？」

眠りは不意に目覚め、何の気なしに瞼を開けてその視界に捉えたのは見知らぬ天井だった。

目だけを泳がせて辺りを見回してみるが全く見覚えのない景色であり、紛れもなく他人が作り上げたモノ、他人がここに住んでいる空間。

「…ん……」

今までの経験が有るから成せる業か…オレはまず覚悟した。

既にもう、また訳の解らん事に巻き込まれたんだと実感しているし

「ん…」

覚悟せんとオレはこの先に待ちかまえている事象に対抗出来ない
…まず、悲鳴を上げる事受け合いなのだ。

「…うー…キョ…ン…くゝん」

…つつう。

刺された痕すら残っていないハズの脇腹が存在した事を誇示する
よう滲むように痛みだす。

オレの横合いから度々に聞こえてくる寝息…今、オレ呼びやがっ
た…の主を恐る恐る見やった。

「くー……」

そこに居たのは…

「すー」

…朝倉涼子。

去年の5月、夕暮れに染まる教室にオレを呼び出したクラス委員
長。

長門が暴走した去年の12月…閑散とした夜空の下、長門に気を
取られていたオレの脇腹にサバイバルナイフを突き立てた殺人鬼。

「んう…」

カーテンから洩れるささやかな朝陽は十分な明るさを持って全て
を明確にする。

木漏れ日程度しかない明るさの中でも艶やかに光る長い髪は光り

の加減で蒼く映る。見た目にも柔らかそうな肌は艶やかで頬は少し紅潮しており、今なおオレの耳朶を刺激する寢息と嗅覚を通して身体の芯を疼かせるような吐息を漏らしているソレは水気を帯びたように潤み、小さく開かれていた。

そんな朝倉の寝顔：人物を特定するのによく挙げられる事の多い、意志の強さを感じさせる太めの眉は緊張感無く、緩く八の字を描いて弛んでいた。

それでもオレは

「…っ」

そんな緊張感の無い緩みきった、油断しきった表情を見せ付けられてもオレの脇腹は痛みを発し続け、身体全体は拒否反応を起こして血の気を引かせてしまう。

何故、お前が居るっ？

胸中で思いつきり叫んだ。飽くまでも胸中：誰が好き好んで眠る殺人鬼の横で目覚めの叫びを上げるバカがいる？

それで済んだのもこんな心臓に負担が掛かるモノを目の当たりにしたにも関わらず、冷静に済ませられたのも強いては自分の奥底：今までに無理矢理に培わされ、まるで金床で鍛え上げられた玉鋼：経験からの耐性という名の賜物だ。

そんな経験が告げている。

「ん……キョンく……ん」

これは許容範囲を超えている。

これが自分の部屋なのにベッドに両手両足を縛り付けられていたらここまで動揺しなかっただろう、何もない独房みたいな殺風景な

部屋の中でたった一つしかない椅子に両手両足縛り付けられていたならこうも動揺しなかっただろう……すまん、誰か助けてくれ。オレの中でのサプライズに対する耐性って奴が間違い無く通常レベルを無視して未踏の道爆進してるっ。

「…キョーン…く〜ん…」

つか、何でオレはお前と同衾してるんだよ…って、あ。

ここでふと、オレはこの場所が何処なのかに気付いた…気付いちまった。そう、

ここはまさかの朝倉の部屋

だ。そして、今オレが寝ているこのベッドは間違い無く朝倉が…

「ん…んん…」

マズっ目え覚ましやがった。

オレは慌てて瞼を閉じ、寝たふりをする。視界が暗闇に覆われるのは限り無く心細いが起きている事を朝倉に知られたらオレは何をされるか…

「…ん…うつゝ…あ、あさ…?」

オレの横でもぞもぞと身じろぎをしながら本気で寝たり無い眠たそうな声で朝倉が呟いている。

「…」

「うつゝ…」

こら…こらっ。

オレがまだ眠っていると思っているのか朝倉はオレの方へと摺り寄ってくるとその身体をオレの腕へ…って、あれ？ 朝倉お前まさか？

何も着てな

って、待てオレまで何も着てくないか？

何故そう思ったか、それはオレの腕にダイレクトに伝わってくる

朝倉の体温は本当に生なんだよ。

朝倉外してくれオレはもう限界だっ。

「……………っん。起きよっ」

腕に掛かっていたプレッシャーが途端に無くなったかと思えば、掛け布団から抜け出した朝倉…宣言に反してベッドの縁に腰掛けてぼんやりとして…いた。

「うー」

宇宙人なのに低血圧なのかと、何やら唸っていたので何かをするのかと様子を見ようと薄目を開けた瞬間、視界に思いつきり飛び込んできたのは長髪に見え隠れする形のいい朝倉の尻だった。

待ってくれ…誰でも良いから待ってくれっ。これ夢だろおかしいだろオレは認めねえぞ？ こんな夢、フロイト博士も大爆笑だろっ！？

「ん…しょ」

朝倉はゆつたりとした動作で立ち上がると背中に張り付いた髪を鬱陶しげに掻き上げる。

掻き上げた瞬間に見えたその後ろ姿には背中を象る美しい曲線。それに追隨するように先ほど座っていてよく見えていなかった女を強調するその形の良い臀部が露わになり、そこから生える脚はスラッとした脚線を描き、太いという訳ではないのに太股はやたらとムチッとしている感が傍目にも伝わってきて何と言つか、無駄に…エロい。

これ以上はマズいホントにマズいつ。

「？」

「っ」

気配でも感じたのか朝倉がこっちを振り向くのとオレが意識して目を瞑るのは同時だった。

暫くの間、オレは朝倉からの視線を感じて生きた心地のしない時間が過ぎると耳が微かな布擦れの音を拾い、着替えているのか？と訝しむ内にそのまま足音が奥へと離れていくのを聴いた。

「……っ」

オレは慎重に薄目を開いて周りを見回し、朝倉が近くに居ない事を確認すると意を決して自分に被せられている布団を剥ぎ取った。そして、

「…は、はは」

布団の中の現状を目の当たりにし、現実逃避も兼ねて無理矢理に笑ってみるが声が掠れる。

…当たり前だ。

「まさか…」

この世界ではオレとお前が”こんな関係”になってるとは夢にも出ねえよ。

そう。確かめるためにベッドの中を調べてみた結果、目の前には何も着てない素っ裸のオレとシワが寄ったシーツの中心…そこは正にこの位置で何もかも致してしまいましたと物語っているかのように残っている、乾ききってしまったアカいシミがあった。

正直、アタマがイテえ。これは自慢だが、オレは幾度となく理不尽なまでに非日常的なモノを体験し、先にも説明した通り動揺なんてモノとは剩りにもあんまりなモノでも無い限り、一切からは無縁だろうと思っていた。が、

「…っ」

これは本当に許容オーバーだ。

「あ、やっぱり起きてたんだ」

「っ！」

そんなオレに向こうから声を掛けられた。

身体が一気に強ばるのを感じる。さっきまで痛みを発していた脇腹の痛みが今まで一層に感じることのない痛みを発した。

「つつっ…」

「だ、大丈夫？」

「!？」

何、の…冗談だ、これ…は？

無いはずの傷の痛み蹲り、急に脇腹を押さえていたオレを心配した朝倉が駆け寄って痛みを生み出している脇腹を軽く添え、やりわりと摩り始めたのだ。

そして、痛みが途端に消える。

「…まだ、痛む？」

覗き込んでくる朝倉はここが痛む意味を全く知らないようで、今もその表情に浮かんではいるのは心配から来る焦燥だった。
何でっ

「…大丈夫だ。大丈夫だから」

そんな本当に心配している顔でオレを見るっ…本当は、剩りにも心配気な朝倉にそう言い放ちたかったが、目まぐるしい展開に追いつかない頭が勝手に判断してオレの口を動かす。

「そんな顔…すんなよ」

「…、良かった…」

…初めて見た。

心底、安堵したかのように胸をなで下ろす朝倉。

それは演技とか芝居臭さなんか全く無く、そんな姿を見ているとオレの中で恐怖でしかなかった朝倉の存在理由が小さく揺らぐ。

一体、どっちが本当なんだ？ 本当にこれがあの朝倉なのか？

オレの脳が勝手に過去のトラウマを思い出していく…夕暮れに染

まる教室の時の姿、肌刺す寒さの夜空の時の姿を。

「……」

「…キヨン…くん？」

「……」

「…」

返事も何も返さないオレに朝倉は何も言えず、互いに無言。だから、朝倉は言葉で聞かず、ただただ脇腹を押さえているオレの手を優しく摩ってくる。

そんないじらしさがオレはいたたまれない気持ちにさせた。

…もう痛くないって。

「…でも、まだ押さえてるから」

朝倉は自分の事のように、今にも泣いてしまいそうな表情で見上げてくる。

これではオレが悪者だ。

…大丈夫

「もう痛くねえよ」

オレは安心させてやる為、柔らかに微笑むと

「……ん」

朝倉は見せた事のない笑顔で応えた。

その後、暫くは朝倉はそのままオレの脇腹をずっと摩ってくれて

いたが、次第に恥ずかしくなったのと痛みが取れたのだと確信出来た安心からか、お互いに服を着ようと提案してきた。

オレも今更ながら未だに真っ裸なのを思い出し、触れられ続けたせいで理性もパンク気味だったので慌てて履いていたであろうトラックスを探し出したのだが、一向に見つからず焦るオレ。すると、

「キョンくん」

オレの傍に居た朝倉がその場で膝を着いて膝立ちになると

「お探しモノはコレかな」

なんて事を曰いながらオレの目の前でそれをヒラヒラと舞わした。朝倉の手に因って舞うソレは紛れもなくオレの一張羅である。…年頃の娘がそんな事するんじゃないやありませんっ。

「ふふん」

と、遠回しに注意してみるがオレの注意をどう受け取ったのか、朝倉は今度は腰元にヒラつかせ始め、

「お、おい……！っ」

それを目で追ったオレは慌ててそっぽを向くハメになった。あ？ 何でだと？ それはな、

「朝倉…お前、それワザとだろ」

「…何の事かしら」

朝倉がどんな顔でそっぽ向くオレを見ているかは知らんが絶対に遊んでやがるっ。

さて、ここで問題だ。今、朝倉が格好か…解るヤツは手を挙げてみる。

ヒントはだな、布擦れの音に腰元だ…何、解らん？ 情けない。ならば、教えてやろうではないか。

「男の子ってこーゆうのが好きなんでしょ？」

「…っ」

朝倉のソレは間違った知識なのは間違いないのだが…はい。正直、たまりません。

さあ、解らなかつたヤツに答えをやるっ。

「…お前、それオレのカッターだよな」

「ん。借りるね」

…事後承諾かい。

はあ…そうだよ。今、こいつの格好は我が北校男子が着る制服の内のカッターシャツ…その一枚だけだ。それ以外何も着ちゃいやがれねーんだよ、コイツ。

しかも…って、あ？ 何故、んな事が判るんだだと？ それは、さつき腰元にオレの一張羅をヒラつかせてる時にだ、そのダボついたシャツの裾ギリギリで隠れてた…茂み？ が見えたんだよっ…で、更に…更にだ。そんな可愛…いや、そんな悪意ある行動を非難しよ

うと思い、視線を朝倉の顔へと上げようとしたら胸元の生々しい盛り上がり方が目に入ったんだよ。で、それが、その…何だ。

「…どうかしたかな？」

と、チラチラと視線を彷徨わせたのがイケなかったのか、朝倉はワザと腕を後ろ手に回して胸を張るとニコツと微笑んだ。

「…えへへ。勿論、上も付けてないわよ？」

すみません。モチロンとはナニがモチロンなんでしょう力？

そう、本来ならオレが着るため平坦であるはずの胸元。それが朝倉によって盛り上げられ、そして後ろ手にしたこと引張られたシャツが殊更に両胸のその凸な部分を強調していやがる。

いつも見慣れているハズの何でもないただの制服だってのになんて威力だ…って、オレは何を言ってるんだ？

「どお？」

いや…どお？ って…

「し、刺激が、強すぎる…な」

勘弁してくれ。

何とかそこまで言っておれが俯くと、

「んー…もつと刺激のキツツいの全部見たクセに。ま、キョンくんらしいけど」

朝倉が言った。

そんな記憶はオレにはない…当たり前だ。オレは今の今まで自分の部屋で寝てたんだからな。

だが、それでも今、絶対にもしかしなくても耳まで真っ赤になつてんのは分かる。

「ふふ。はいはい、もう意地悪しないから、機嫌治してよ。ね？」

許しが出るがオレは顔を上げる事も出来ず、ただ頭を大ざっぱに搔く事しか出来なかった。

それでも朝倉にはこれだけで通じたのか、そんなオレの仕草を返事と受け取ったようで、

「じゃあ、もう暫くだけ、そうしててね…？ 別に顔上げてもいいけど、流石にキョンくんに見られながら着替えるの…わたしの心臓にも悪いから……」

オレに向かつてそう色んな所が熱くなるような事を告げるや、手に持っていたトランクスを床に落とすと暫くして、その身に着ていたカッターシャツも床に落とした。

「…っ……っ！」

俯くオレの視界に床に落ちたカッターシャツが入る。

今、顔上げればまず間違いなく朝倉の生まれたまま姿が見れるだろう…ただそう言葉で表して考えただけで何と強力な誘惑だろうか。

「…見ちゃ…ダメよ？」

分かつてる、分かつてるからそんな妙に熱っぽい声で囁かんでくれっ。

「と、とりあえずシャツ返してもらうからな」

少しでも気を紛らわせる為、オレは朝倉の返事を聞かずにカッターシャツを手にとると素早く腕を袖に通した。が、

「っ……」

抜かったっ……と思った時にはもう時すでに遅し。

袖に腕を通しながら羽織った瞬間、オレの鼻腔をくすぐる朝倉の……女の子特有の匂い。

生活臭として部屋一帯に立ち込める朝倉の匂いなど比較にならない程の一線を期する匂いはオレの脳の何かを思いっきり揺らした。

……ヤバいつ。頭がくらくらする。

「……どお？」

確信犯がこれ見よがしに聞いてくる。

何と言つか。ベクトルがどちらに向いていようと朝倉は朝倉……隙あらば、だ。本質はこんななんだなと妙に納得すると思わず苦笑した。

これで余裕が出来た、オレは

「ノーコメント」

「むー」

と、ささやかな抵抗を返す事が出来た。

…

「…」

「…」

お互いに一応は制服に着替えたオレ達。

色々とモタついたオレより先に着替え終えた朝倉が淹れてくれたコーヒーを今は飲んでいる。まさか朝焼けのモーニングコーヒーをつい使い古されてそんなフリーズをオレが体験する日が来ようとは、な。

あとオレには何も聞かれずに出されたこのコーヒー…飲んでみるとそれがいつもオレが好んで作る時の濃さと甘さだったのに驚いた。…いや、まあ。こんな関係だから嗜好の好みすらも知られている程の長い付き合いなのは当たり前か。

「…」

マグカップの中で揺れる琥珀からチラリと朝倉の方に向ける。

見慣れたセーラーにカーディガンを羽織り、その上に何故かオレのブレザーを着込んだ朝倉が袖から指だけ出し、マグカップを両手で抱えるようにしながらチビチビと飲んでいる。

現金なモノでオレを苛んできたトラウマと脇腹の痛みは今までの事でかなり和らいでいる。

…ホント、現金な奴だよなオレ。

「？」

そのまま眺めていると最初のオレと同じようにマグカップの中の琥珀に視線をやっていた朝倉がオレの視線に気付き、ふと視線を上

げると少しだけ小首を傾いだ。

その動作に連られて後ろに括られたポニーテールも微かに揺れる…はい、させてると思ったよコノヤロウとやさぐれてクダ巻いている、そこ。改めて現金な奴めっとか刺されて死ねっだの情報結合解除されちまえっだの神人に踏みつぶされるっとかマツガーレに掘られちまえっとか吼えないでくれたまえ。

仕方ないだろ？ ただでさえ谷口評価AA+なのにその上で適度なまでに長く、その艶やかで綺麗な髪だったんだから。朝倉も朝倉で快くポニーにしてくれたんだからよ。

ホント現金だオレ。トラウマが和らいでいく…魅力30パーセント増しは伊達じゃない。

「…」

などとは思考が暴走したりしているが、考えなきゃいけない事はちゃんと考えている。

だから、

「…」

ここまで全く会話が無いのは正直、嬉しい状況なのだ。

今、この身に起こっている事を整理してまとめられる間が欲しかったからな。時間を確かめる為に見た目覚まし時計には日付表示も付いていて助かった。

この世界はオレが眠りに就いた年月と変わりなく5月であり、そして…

この日、朝倉が暴走し長門によって光の粒となった日だった。

「…」

…あれから、一年か。

「…ちよつと意外、かな」

突然の返事に思わず身体を強張らせ、その言葉の真意にオレは無駄とは知りつつもすぐにでも動けるようにする。

思っておくだけのつもりが口について出ちまったらしい。

これはっ…

「わたしがキョンくんに告白した日…」

…え？

「あ…」

「えへへ。今日で…一年になるんだよ」

身の危険を感じ、緊張状態の身体が一気に緩んでしまう。

あの世界で、あの時の夕暮れに染まる教室で起きた一生忘れられないあの出来事の前。それはゲタ箱で手紙を見た時、まさか…っと思いつながら頭隅に夢想した可能性であり、確かに数あった選択肢の中の一つだった。

実際はまあ、あんなだった。しかし、今のこれは…

「…最初は何を言いたかったのか分からなかったな、アレは」

「…し、仕方ないでしょ。告白するのなんて…その、初めてだったし…」

そんな、オレの記憶にはない情景を思い出し、頬を紅潮させたか
と思えば途端にクスツと笑い出してオレを見つめてくる。

「でも、キョンさんの返し。アレもどうかと思うけど?」

む、オレか?

「…あー…確か、日本経済の話かと言ったような…」

「そう。こっちは真剣だったのに危うくコケそうになったんだから
ね」

何ともまあ、状況は違えどもお互いに言ったセリフは寸分の違い
も無いとは。だが、これである程度の予測は着いたのは確かだ。

最初に頭によぎった事が本当にそのまんまで行われ、朝倉の告白
を受け入れたオレは一年の交際を経て今に至ると……何だ。殺人鬼
となんて羨ましい訳ないハズなのにこの敗北感は何だ?

「ま、中学からの付き合いだしキョンさんの性格、分かってた言え
ば分かってただけど…流石にね」

…っ?

「? キョンくん?」

「! あ、ああ……そ、そうだったか?」

中学…今、朝倉は中学からとそう言ったなっ?

オレの中学時の記憶に朝倉は居ない。印象に残る残っていないと
かでは無く居なかった。

…嫌な予感がする。

「…中学、か。確か…話し掛けたキツカケってのは」

「…はあ。告白した日は覚えてくれたのに肝心の知り合ったキツカケ忘れるなんて…」

とまあ、ぶつくさとしながらもそれをなぞり、話すことが嬉しいのか嬉しそうに事の顛末を話し始める。

結果だけを言おう、

佐々木と話すキツカケになった顛末に似ていた。

話したのは学校…勉強を朝倉から教わり、塾には行かず等の多少の差異があるが、相手は朝倉と置き換えられた上でオレに教えてくれた。

オレは…オレの表情は

「…キヨン…くん？」

今、ちゃんと平静を保っているだろうか…いや、ある程度は予想していただろう？ でも、佐々木はっ？

「…体調、悪いの？」

心の内の葛藤を余所に朝倉はオレを気遣って気を配って、心配してくれている。

何と言うか…それがせめてもの救いだった。

「…」
「…」

また会話が途切れたなと思った所で

「……」

そんな糸口を見いだせない所にセットされた目覚ましが突如鳴り、オレ達二人は一晩共にしたのである。ベッドの上を見た。

本来なら否応無しに最中の情事を思い出し、互いに顔を見合わせて照れるような気まずいようなこそばゆい思いをするんだろうが、生憎オレの方には…

「…キョンくん？」

「ん…？」

オレの名を呼ぶ朝倉を見た。

そこには今までの浮ついた表情とは一変して思い詰めたような…いや、今にも崩れてしまいそうな儂い、消え入りそうな笑みでこちらを見つめた。

何でそんな顔するんだよ、朝倉。

「…後悔した？　こう、なっちゃった…事」

「…」

…ここは間違えられない。いや、間違えちゃいけない。朝倉の為にも、この身体の本物の持ち主の為にも。

「…キョン…く」

「んなワケあるか」

「……」

「……逆に付き合い始めた時から一年も持たしたオレの理性を褒めてくれよな」

オレがそう言うときとは打って変わって急に真っ赤になったかと思えば、瞳を潤ませてこちらを見やった。

この朝倉は本当に見たこともない表情をオレに見せてくれる。

「えへへ……もう、なあに？　我慢したご褒美でも欲しいのかな？」

それはとても魅力的な言葉だった。

朝倉の言うご褒美が何なのかはいまいち分からない。が、状況が状況だけに多分、そういうご褒美なのだろう。

もしかしたら違うかもしれないが、こちら健康優良児な上に童貞だ……この身体は違うが。

正直、聞いただけで血圧が上がりそうだぜ。

「魅力的な提案ではあるが……挑発には乗らないぞ」

「ふーん……ホントに？」

「疑り深い奴だな」

一年も持ったオレの鉄壁の理性をそんなに侮らないでもらいたい。あの五角形建造物が採用してるファイヤーウォール並だぞ？……

それに、

「今日は平日……オレ達は学生で学校行く日だ」

「サボっちゃお？」

こーら。

「……分かったわよ」

あの朝倉が拗ねた表情でそっぽを向いている。その様子は本当に愛らしく、その容貌とそっぽを向いた時に揺れるポニーテールと相俟って破壊力抜群…我が儘言われても全部許しなくなっちゃまう。これはもう断腸の思いだ。

…悪い。

「埋め合わせはちゃんとする」

「…じゃあ、今日は文芸部に寄り道せずわたしに部屋のね」

と、言うつと朝倉はまるで華が咲いたようなと形容したくなるような満面の笑みを見せてくれた。

「ああ。あと登校する前に一旦、家帰るわ」

「ふえ？ ……一緒に行かないの？」

だ・か・ら、そんな顔すな。

「流石に顔出しとかなないと帰った時におふくろと妹に何言われるか」

「…あ、おば様に宜しく言っというてね。またお料理教わりに寄らせてもらいますって」

おふくろの事をおば様って。しかも、どうやらウチともかなり親密な交流がある様子…何ともまあ。

「りょーかい。伝えとく」

「はいっ」

立ち上がるオレに朝倉が元気良く鞆を手渡すと後ろから付いてくれ、玄関の所まで見送ってくれた。

…じ、じゃあ

「学校でな」

「…うん」

靴を掃くのに少し手間取りながらもオレはドアノブに手を掛けながら後ろを振り返って朝倉を見やる。

その表情というか、それはもう片時も離れたくないオーラを放たしまくりだ。

…こ、これはどうしたら？

「…っ。早く行かないと遅刻しちゃうよ？」

…はっ！

気付けば溜め息混じりになっている朝倉。

どうやらオレはそのままジッと朝倉の方を見たまま固まっていたらしい。

「お、おう。じ、じゃあ学校でな」

と、慌てたオレは恥ずかしさから急いで出ようとした所を後ろから手を掴まれた。

…？

「どうかし」

振り向いた瞬間、視界一杯に朝倉の顔が迫ってくる。

「ん」

「！？」

間近にある臉を睨った朝倉の顔、唇に当たる柔らかい感触、鼻腔をくすぐる朝倉の吐息と匂い…

「う…ん…」

「いて…っ？」

呆然とする中で途端に走った痛み。

慌てて見やると上目遣いに見上げてくる潤んだ瞳の朝倉と目が合った。

どうやら下唇を甘噛みされているらしく、痛みが走ったのは最初だけで後はふにふにと柔らかいものだ。

…その、何だ。

「これじゃあ動けんのだが…」

強く出られず、やんわりと言うと朝倉は素直に従い、唇を放した…つつすらとだが唾液が糸引いてた。

一歩離れた朝倉はこちらを見ずに俯いている。

「…」

えと…

「…朝倉？」

オレが呼ぶと朝倉の肩がビクッと動く。

「…大丈夫」

「大丈夫」

声を掛けようしたら朝倉は顔を上げて微笑み、

「大丈夫だから。ほらっ、一回帰るんだったら早くしないと間に合わないよ？」

「あ…ああ。そうだな」

「じゃ、学校で。気を付けてね」

「ああ…」

朝倉の言葉に見送られながらオレは外に出る。

さっきの妙な間が気になったが、先程のキスとか今までの諸々の事でもう限界で顔をみるには気恥ずかしくなっていたので見れなかった。

玄関が締まるのを確認するとオレはふと周りの景色を見やる。別段、変わらない景色で何も変わっていない…自分以外は。

「…」

オレは携帯を開いてアドレス帳を確認する。
トップには朝倉涼子の名…それに続いて国木田、谷口…と、後は
その他諸々で肝心の涼宮ハルヒを筆頭に古泉や朝比奈さん…頼みの
綱の長門の連絡先までもが登録されていない。

「参ったな…」

…いや、一縷の望みはある。

朝倉が口にした”文芸部”の存在…少なくともSOS団アジトと
なっている存在自体はある。ただ、そこに前回と同じく皆が居ると
は限らないし脱出プログラムがあるかどうか分からない。が、必
ずあるに決まっている。

そう胸に秘めてオレは踵を返してエレベーターの方へと向かう。

「あつ…ちつ」

部屋の前で少し呆然としてたせいでちょうど上がってきていたエ
レベーターが5階を過ぎてしまった。
舌打ちしながら下のボタンを押す。

「…？」

表示を見上げているとエレベーターが7階で止まり、しばらくし
て下の階へと降りてくる。

「…7…階」

オレの心臓が跳ねる。

7階…7階には長門の部屋の708号室がある。

「長門…っ」

エレベーターが5階に到着し、その扉が開かれる。そして、

「…」

その中に居たのは全てが無かった事、全てをリセットしたかの如く、視線に感情を乗せる事もなく、

「…なに？」

物を見るような瞳でこちらを見上げている眼鏡を掛けた長門有希がそこに居た。

i n n o c e n t b l u e 2（前書き）

連載するしないを読者様に聞いておきながらここに投稿するのを
お許し下さい。

執筆が行き詰まっっていて気晴らしに作者紹介文の更新をしてきた
のですが、実際に自分が迷走していると文にしてみても自覚してしま
いました。

自分でも迷走しつつ騙し騙しやってきたんだなと思ってます。ラ
ストの展開は決まっているのにそこまで繋げる過程を詰められなく
て…何か今書いてるのも迷走してる感がありますよね……ははっ（
自嘲

すみません。自分でも訳が解りません。これを投稿したら一度、
完結設定にして凍結させます。本当に申し訳ありません（謝

「
…」

空気が重苦しい。

久しく忘れていたこの感覚に頭痛がしてくる。

「
…」

地上を目指して降りるエレベーターの中にはオレと長門の二人だけ。だが、長門がこの世界にちゃんと存在していた事とは裏腹に事態はあまり芳しくない…と言うのも、

「…なに？」

…い、いや。

「何もっ」

「そう」

こんな感じなんだよ、さっきから。

別に改変された世界の時みたく長門まで変わったとかではないんだと思う。あの時は内向的で人見知りのする、恥ずかしがり屋な印象だった。あれはオレ達と変わらない本当の人間とし、本来としての人間味を持っていたと言える。

だが、今回のこの長門は…

「…」

初めて出会った…最初の頃の長門を彷彿とさせる人間味の無さだ。これは元の世界でのあの長門がどれだけ成長し、どれほどまでに感情というモノを表に出していたのかが痛いほど分かる。無機質・無関心・無感情の無い無い尽くしになってしまった長門…逆にコロコロと感情を変化させて更に人間味が溢れている朝倉。一体、何が

「今日…」

へ!?

「…今日は涼子は部屋に？」

独り言のように呟かれたそれはオレに対しての問い掛けだった。
…き、今日？

「い、いや……えと…寄らずに部屋で…その」

って、オレは何を言わんでもいい余計な事を長門に言おうとっ

「そう」

しどろもどろな返事にも簡潔に応え、それ以上は興味ないという風に会話はそれでぶつ切れる…かと思っただが続きがあった。

「…わたしはいつも通り、なし崩しにそのまま涼宮ハルヒの活動に

出ることになる。だから、いつも通り遅くなるとそう伝えてほしい」
「っお…」

「…なに？」

オレが思わず出した変な声に長門がその感情の起伏を感じさせない平坦な視線を向けてくる。

「…い、いや。何でもない、すまん。」

「っ、伝えておくぞ。うん」

「そう」

オレは視線を逸らしながら何とか了解したことを伝えたと長門の視線に晒されながらも先の言葉の意味を何度も反芻する。

ハルヒは居る。しかも、北高に。

長門が部室に来るか来ないかを訊いたのも涼宮ハルヒの活動… SOS 団の活動に参加するかしないかを暗に含んだモノに違いない。これは案外、楽に事が運ぶかもしれない。
「…それでもなるべく情報が欲しいところ、か。」

「文芸部…の活動ってどうなるんだ？」

「…元々、部としてはわたし達三人では成り立たない。理由はどうあれ、涼宮ハルヒ達が文芸部を間借りし、席を借りて初めて”部”として機能しているのが現状。代わりにわたし達が SOS 団に強制入団となったのも仕方ない…持ちつ持たれつ」

よし。SOS団も存在する…って、ん？ 文芸部員が…三人？

「…文芸部員ってーと、長門…と朝倉？」

「わたし、朝倉涼子…そして、あなた」

あ、やっぱりオレか…まあ、分からんでもない配役だな。

しかし、嬉しい情報だ。多少の差異には目を瞑るとして本当にこれは有り難いつ。何せ、前回で脱出の鍵としてのカードだったモノが既に全部揃ってんだから。

思わず嬉しさが顔に出てしまいそうになるのを抑える。長門からの視線をまだ感じるのもあって口元は手で覆い隠しながらだが。まあ、そんな間にエレベーターが1階に着いた。

「…とりあえず、朝倉には伝えておくから」

抑えつついるのが不便なのでオレは先にエレベーターから出ると長門にそう言ってマンションから外へと出た。

「お願い」

長門の声に送られてオレは足早にその場を後にする。

もし、この時。あまりにもこう浮かれたりせず、後ろに居た長門に注意を払っておけば、家路へと急ぐオレの後ろ姿を角を曲がるまでの長門が微動だにせず、ずっと注視していた事に気付けたかもしれない。が、オレは全くそんな事には気付かなかった。

…

時間は進む。

一旦、家に戻ったオレは今日の授業の用意を形だけでもと鞆に詰め込み、そして学校へと至るハイキングコースを嫌々に満喫しながら、

「…はあ」

オレはマンションを出た時とは打って変わってダウンー気味だった。

それと言うのも家に帰った瞬間、

「ああーっ、キョンくんが朝帰りだあっお帰りいー！」

妹のご近所様にも聞こえんばかりの大音響を発しながら、オレに特攻体当たりをかましたのを皮切りにやれ、

「ねえー何処行つてたのー？」

から始まり、

「女の子？ 涼子ちゃんの所？ ねえー、ねえってばあー」

だの…

「何してたの？ 何したのー？」

だの、と………な、なあ？ その最後の質問は意味を知ってて訊

いてきたりとかじゃないよな、妹よ？ 違ふよな？ そうだよ」といつもの調子で言ってくれんとそのニヤニヤ顔は邪推しちまうつ。

もしそうでないとなるとだ、オレは元の世界に戻った暁にはお宝の配置がいつものちゃんと元の位置にあったかを念入りに調べて形跡がないのを見て安心した後、隠し場所を変更の上でセキュリティを厳重に且つ完璧にしなきゃいけなくなるっ…と思ったのだが、自分で言うのも何だが、オレはヘタレだった。

妹の質問責めに、あー…とか、うー…とかしか言えず、

もう隠し場所変更を心に誓うしかなかった。

そしてその後も続く妹の質問連打を黙秘のバンザイ特攻でかいくぐり、心身ともにボロボロになりながら安堵したのも束の間、今度はおふくろに捕まり、そこでおふくろ宛ての朝倉からの伝言を思い出したので伝えた途端、やれ

「あの子はいいい娘さんよねえ…あんたには勿体無いわ」

から始まり、

「あんないい娘さん泣かさないようにね。もし別れたらあんた、一生結婚できないから」

だの

「だから、ちゃんと勉強して涼子ちゃんと同じ大学行きなさいよ。何処だろうと費用はこっちに任せればいいから」

終いには

「まあ、朝帰りまでしたんだからあんたも絶対に離したりしないとは思っけど。孫が出来たら言いなさいよね」

…お母様、オレ達まだ高校生です。

もう何と言いましようか、絶句したオレはそれしか言えなかった。いや、それよりも訳が分からん。確かに朝帰りになつてはいるが、何故に朝倉の家に居たと妹やおふくろにはバレているのだろうか？ 帰る道中、携帯の発着履歴等を調べてはみたが朝倉が筆頭な位で発信でも家には最近のはない。だからそういう内容のやり取りがあった訳では無いはずなのだ。

…これが巷で言う所の女の勘というモノか？

「おおーっす、キョンっ！」

そんな感慨深いテーマに何とも言えない気分のオレに向かつて後ろから軽薄そうな声で挨拶してくる奴が一人。それは皆さんもご存知、W A W A W A こと

「…谷口か」

「何だ何だ、おい。朝っぱらから不景気なツラしやがってよー…あ、もしかしてよ、とうとう朝倉と喧嘩でもしたか？」

元の世界では名前の部分はハルヒでここでは朝倉…お前がオレに話し掛ける為のネタはコレしかないのかよ。

…はあ。

「…違うつての」

「あんだよお…何かあったんだろー？ いい加減溜め込みすぎる

と身体に悪いって。景気良く謳ってスッキリしようぜえ?」

…煩い奴だな。

「別に何も溜め込んでないっての」

「へ…じゃあ、何か? 溜め込む前に朝倉がスッキリさせてくれるのか?」

…は?

言葉の意味を計りかねたオレは思いつ切り訝しんで見やるが、谷口はそんな事はお構い無しに首に絡んでくる。

「何の話だ?」

「いやっ、だからさっ俺達は健全健康優良な男子高校生でだな? やっぱり溜まるモンは溜」

「二人ともお早う」

耳元でかなりの大音量で話す谷口の言葉に被せるように後ろからまた聞き知った声のヤツが後ろから挨拶してきた。

…おーす。

「…で、だ。朝から悪いんだが…国木田。谷口がウザったいので引き剥がしてくれ」

オレは後ろを振り返り、挨拶をしてきた国木田には悪いと思いつながらも助けを乞う。

「なっ、キョンおまつ…ウザいはヒドくないか?」

「はは…確かに耳元でああも大音量で話されると、ね」

オレの容赦なさに一気に情けない顔になる谷口に追い討ちとばかりに国木田が同意すると今度は声を潜めだした。

「それに朝からあんな内容を大声で話すなんてさ、谷口って理性より本能で動いてるって思わない？」

「あん？ 何がだ？」

すまん。国木田、言ってる意味がいまいち分からんのだが？

「だあかあらつ、早い話お前にはもう隠してるブツの類はもう必要ねえだろ？ 前から言ってるけど俺が有り難く引き取ってやつからさ、いい加減にしてサッサと寄越せ」

「は？ ………………っ！」

こ、こいつつ。

かなり時間を要してからやっと言葉の意味を知ったオレは一気に顔が真っ赤になった。

「なっ、た…た谷口っお、おまつ」

「おーおー、真っ赤になっちまってまあ…お子ちゃまめ」

「はあ。いくら仲を突つつくと面白いからってキョン冷やかすの止めない？ 趣味悪いよ」

国木田が呆れて肩をすくめて溜め息を吐いている。

… 本当だ、全く。

「ばっか。俺はな？ 奥手なキョンをだなあ、その気にさせよう」と

「彼女出来ない僻みとかやり場のない欲望を八つ当たりでキョンにぶつけてるようにしか僕には見えないなあ」

「つつぐ…… けどよあ、一年付き合ってた何の進展もないってのは」

… 進展。

その言葉を聞いた瞬間、オレの脳裏に部屋の玄関でのキスが蘇り、続いて行為… は、オレの意識には関係ない為過程は出てこないが、ベッドでの裸で抱きついた時の体温やシーツにあったアカいシミを思い出してしまう。

「あれ？ キョン、顔赤いよ？」

「へ？」

覗き込んできた国木田がそんな事を言ってきた。

そ、そんなに顔赤いか、今っ？

「うん…… あれ？」

… こ、今度は何だ。国木田？

「キョンって何か香水みたいなのって使ってたっけ？」

は？ 香水って…何の事だ？

「香水い〜？ コイツがそんなのするようなガラかよ……………って、確かにするなあ…？」

そう言つと二人が何やらオレに向かって鼻をヒクヒクさせ始める。そんな端から見たら男二人が男の匂いを嗅いでる図…怪しさ大爆発じゃねえかよ、おいっ！

「は、離れる。お前らっ」

「…どこかで嗅いだ事あるかな。コレ」

「んんー…そつか？ あー、山根が嗅いだら分かつかもな」

山根…あだ名が”嗅覚”となる程の匂いフェチで校内でも有名な変態…その変態の中でもキワモノの一面を担うヤツだ。その的中率というのはオレは聞きかじりな為、その真相は知らないし分からない。が、言いたくない程のレベルだ。

…これはマズいつ。

「な、なあ、もういいだろ？ 早く行かねえと予鈴が鳴るっ」

「んー。そだね」

「いやっ待て！ 俺達はダチとして真相を知る権利があるっ」

いや、ダチならそれこそその辺はソツとしとこうとか少しは思わんのか、己はっ！？

「ええい、この話はもう終」

「ちよつと三人とも往来の真ん中で何やってるの！」

…うーあゝ。

突然の怒声による注意。

このタイミングで来てはいけない声の主が登校してきた事にオレは思わず顔をしかめる。

あとの二人は振り返ると注意してきた人物に挨拶を返していった。

「あ、朝倉さんおはよ」

「ようつ、朝倉つ。いやな、キョンがガラにもなく何か香水が何か付けてるらしくってよあゝ。浮気かもしんないから今から問い詰めてんだよ」

「え…うわき？ 香水みたいになって…え？ えっ？」

谷口の言葉にキョトンとする朝倉。

そこへ一陣の緩い風が朝倉からオレ達三人の方へと吹いていき…

「あ、この匂い。そだ、朝倉さんのだ」

「あ、そうか？ んん？ おつ、おお確かにそだな」

と、オレが谷口と国木田がお互いに見合つて頷いているのを見ていると思いつ切り刺さる視線を感じて慌てて発生源へと見やると

「……っ」

顔を真っ赤にした朝倉が何か思いつ切り睨んできていた。

その視線が何を言いたいのか。刺さる視線の先はオレの着てる制服…ブレザーないし中のカッターシャツ。

視線に籠もった内容を要約しますと、

もしかして一回帰ったクセにシャツ着替えないでそのまま来たのっ？

と、言っているようすな……いや、コレ悪いのはオレか？

「！ ああっ！ ま…まさかつお、おまつお前らっ」

「っっ」

谷口が突然何かに気付いたように声を上げて何やらオレと朝倉を交互に見やる。

その表情は自分だけ置いてけぼりにされた疎外感のようなモノとか悲壮感とかみたいなのがもう、ありありと浮かんでいるようす…
ってイヤな予感がする。

…ま、待て。

「は、早まるな。谷ぐ」

「キョンが俺を置いて先に大人になりやがったああああっ！！！」

裏切り者おっとか言いながらあり得んスピードで上り坂を爆走する谷口。

「って、ぎゃああああっ谷口ってめっ、大声でんな事言いながら駆け上がんじゃねえっ！！！」

アホだアホだとは思っていたが、そのアホが極まって何っ！暴拳

をつ！ …… て、んんっ？

「うわあああーっキョンがあっキョげぼっ?!」

喚いていた谷口がコケる。

100m程走った辺りだろうか、爆走する谷口の背後から突然降ってきた缶…直撃音の鈍さからして未開封…が後頭部に当たり、もんどりうってと言うか、それが原因で何やら盛大にコケて停止し、倒れてからはピクリともしなくなった。

「…」

あの国木田もあまりの事に何も言えないでいる。

そして騒がしかった登校風景のハズが、今はやたらと静まり返っており、周りに居た連中も動きが止めて微動だにしない谷口を見やっているという、シユール極まりない状況

「つてええっ！！ 誰だっ中身入ったままの缶当てやがったのはっ！?」

と、今までピクリともしなかった谷口が突然起き上がり、凶器である缶を持って辺りに喚きちらし始めた。

…ちっ、しぶとい。

「ちょっとキョン。それはいくら谷口でも可哀想だよ」

それを皮切りに喧騒が再び戻り、国木田も口を開く。

…全ての静と動を握る谷口。アイツのネタっぷりは侮れんな。

「あれをネタで片付けるのもどうかと…」

確かにピクリとしなかった様子は笑えなかったが、元気なようだしそれでいいんじゃないかとオレは思うね。

「谷口だし？」

「ああ」

「ぷっ…ふふっ……………」

呆れていた国木田は吹き出して少しだけ笑うと、急に笑うのを止めて口を閉じたので、何かあったのかとふと見やると国木田もこっちを見ていた。

…何だ？

「どうかしたか？」

「いや。とりあえず、おめでとう…って言おうと思ってさ」「っ！」

とまあ、急に言いやがった。

忘れてた。国木田は表立って冷やかしたりするような谷口みたいな無粋な人間ではないのだが、かと言ってそう言った類のモノを嫌う訳でもない。

ただ、他意もなく真っ直ぐに告げてくる分、油断してる時に来るので下手したら谷口よりもダメージがデカい…狙ってる訳じゃないとは思ってから尚更、質が悪い。

「じゃあ、僕は谷口助けないといけないから先に行くね。キヨンは朝倉さんと一緒にゆっくりおいでよ」

それだけ言うと国木田は何も言えないオレを余所に、割合足早に谷口の方へと走っていった。

「ほらっ、谷口。喚いてないで早く立たないと皆の登校の邪魔になるよっ?」

「ああ、国木田。くそっ誰だよ痛え…って、あれ?」

何やら不思議そうな表情を浮かべて谷口がこちらを見ている。
…何だあ?

「俺はいつの間にキヨン追い越したんだ?」

「え…覚えてないの、谷口?」

「は? 俺、さっき坂登ってたらキヨンの後ろ姿見つけて…んで、声を……んん?」

「…とりあえず教室行く前に保健室行こっか」

国木田に肩を貸されながら何やら首を傾ぎながら歩き出す谷口。
多分、モ口後頭部に缶の直撃を食らったせいかこころ分ぐらいの記憶が飛んだらしい…誰の仕業かは敢えてツツコミはせんがこれだけは言わせてくれ。

「とりあえずグッジョブ」

「何がグッジョブなのっ?」

怒りを含んだ声に振り向くと腰に手を当てて怒り顔の朝倉がジッと見上げている。

なにをそんなに怒ってらっしゃるのか…は、理由はやっぱり、

「何で着替えてないかなっ？」

こ、これはだな。

「オレも昨日からだし着替えようとは思ってたんだが…その、」

妹とおふくろが、な。

オレは家での事のあらましを簡単に言つと、更に真っ赤にして怒り浸透なお顔になってしまった。

「…か、かえつてすぐにい、言っちゃったの？ おばさんにも妹ちゃんにも！？」

「ま、待てつて。直には言っていないんだってオレはっ向こうが勝手に…だな」

と、弁明するが朝倉にはもう聞こえてそうになかったりする。

「…ど、ど…しよ…？ ううつ、次キ……くんの家に…く時、わたし、ど…顔して……ばいい……お…っ」

朝倉は頬に手を当てたまま、何やら身体をフリフリクネクネとまあキヤーキヤー言いながら何か嬉しそうな顔でブツブツと呟いている。

…おい、戻って来おい？

「っは！ わ、わたしは何を？」

呼ばれて正気に戻ったらしい朝倉がオレに訊いてきた。
…知らん。オレに聞くな。

「つか、そんな事よりサツサと行くぞ」

「そ、そんな事って…わたしにはその…スッゴク重大なんだけどなあ…」

「ったく。ほらっ、学校が始まっちゃう」

「ふえっ？」

一向にいつもの委員長然とした朝倉に戻りそうにもないので、このままでは埒が開かないのと思ったオレは朝倉の手を握ると連れ立って坂を登る。

「…？」

「っ…」

最初に何やら素っ頓狂な声を上げたのが気になって後ろから付いて来る朝倉を見やるが、何やら下を向いていて表情は見えん。

まあ、あのままの状態よかマシか。道中、やたらと視線を感じたのが気味が悪かったが時間的に余裕もないので無視しつつ、オレは門を越え、校舎に入るとゲタ箱から朝倉と自分のを出し、何もかも手を繋いだままで2ー5を目指す。

「う、……うう、…うきゅっ？」

廊下で人とすれ違う度に後ろの朝倉が何やら奇妙な声を上げてい

るのが聞こえる。何と言うか、理由は分からんが今までに聞いたこともない反応なのでオレは内心で微笑笑にも似た何かを浮かべる。何てったってオレの中での朝倉って存在ってヤツは、サバイバルナイフを振り回してるあの姿しか思い出せないんだから…とりあえず、あの場をサッサと去りたい為に勢いで手を繋いで引っ張ったんだが、意図せず意趣返しになっちまったか？

…っと、もうそろそろ教室だな。

「え？ あ…」

ここまで来れば手を繋ぐのはもういいかと思い、朝倉の手を放すと後ろから小さい声が聞こえた。

…？

「どうしたか？」

「えっ？ う、ううんっ」

振り向いて聞くオレに放した手をジッと見ていた朝倉は慌ててぶんぶんと勢い良く首を横に振る。

その動作に連られて動くポニテの動きが何とも…っと、いかんいかん。

「っぷ……なあに？ キョンくんまで首振って」

オレまで首を振りだしたので朝倉が可笑しそうに笑う。

…いや、まあ。何だ…

「見惚れたっつーか何と言うか…」

「えっ、ええっ？」

「やっぱポニテが似合うなあって」

「うゝ…ま、またそんな事、真顔で言つてえ」

オレの朝倉のポニテは最高発言に顔を羞恥で耳まで真っ赤にし、涙目にもなつて睨み上げてくる賛辞を向けられた当人。

朝倉が言うに、この世界のオレはそれだけの綺麗な髪の長さを持っているのにポニテにしないのは勿体無いとか何とかと力説しまくった後、その勢いでもつて朝倉を説得し且つ説き伏せ、その場でポニテにさせたらさせたらでその真顔で

「ばつちりだ。オレの目には魅力度36パーセント増しになったように見えるぜっ」

と、あの時ハルヒに言ったアレを曰つたらしい。

そこまで説得するとその情景を思い出したのか、またもや妙な声を上げながら真っ赤になつて俯いてしまう朝倉。

…っぐ、か、可愛いじゃねえか…くそっ。

「おらー、そのバカップルっ。HR始めっから教室入れっ」

いつの間に来たのやら岡部が現れたかと思えば、オレ達をバカップル扱いしながらもこちらを無視しつつ、215の教室へと入っていく。

…あー

「教室入っか」

「…うん」

恋人同士…朝倉は素直に顔が真っ赤だが、実際オレの意識ではそうではない。が、朝の事柄がそうだと示しているのでオレは改めて認識させられた、その理由で顔は真っ赤だ。

そんな二人して顔が真っ赤になっているのを自覚しつつ、恥ずかしいやら何やらで何も言えず、そそくさと教室へと入り、オレの予想通りの席順…朝倉が一番後ろでオレがその前の席…に座った。

…

授業は静かなモノだ…後ろからのシャーペン攻撃が無いからな。それが無いだけで色々と周りを見る余裕が出来て有り難い。

2・5の風景だがやはり見慣れた人物がいない…ハルヒが居らず、長門も居ないのだ。ならば、何処の教室に居るのか？ その辺りの事も含めてを谷口辺りに聞く必要があるな。

「…キョンくん？」

と、今日しなければいけない事を考えていると後ろの席に座る朝倉が指でツンツンと突っついてきた。

…ん？

「どうかしたか？」

「…別に、どうってワケじゃないんだけど……」

朝倉はオレが振り向くと何故か言いにくそうにオレから視線を合
わしたり外したりする。

「…何だか難しい顔して変に教室見回したりしてたから……気にな
って」

…良く、見てんだな。

この世界のオレは幸せなヤツだろうな。非日常からは離れた所に
身を置いて、朝倉みたいな美人でポニテが無茶苦茶似合う彼女が居
て…だつてのにオレはそんな状況を良しとせず、元の世界が恋しい
と思つてる。

そんな非日常に慣れ、中毒症になつた我が身が恨めしい。

「何もないって安心しろ…何っーか、ただの気分だよ。気分」

「…うん」

納得したのかしてないのかは分からないが、朝倉が頷くのを確認
したオレは安心させる為に笑みを返すとそのまま前を向いた。

今の朝倉には悪いとは思つ…が、それは思つてるからこそなのだ。
朝倉はオレを恋人である”オレ”だと思つている…だから、早くこ
の身体を元の主に返さないと長引けば長引くほど二人に悪い。

しかし、この誰にも頼れないという状況は実に半年振りだ。一度
は経験している分、一応は慣れていると言えは聞こえはいいがやつ
ぱり辛いだな。

この後にしなければいけない事を考えると一杯有りすぎて正直、
我が身が一つしかないというのも本当に恨めしいぜ、全く。

「キョンくん？」

「キヨン？」

「おい、キヨン？」

あ？

呼ばれて振り向くと何故か心配そうな顔でこちらを覗き込む朝倉と国木田、ついでに谷口。

…何、授業中に立ってんだお前ら？

「授業なら今さっき終わったよ、キヨン」

「は？」

国木田の言葉にオレは辺りを見回すとクラスの連中は思い思いに休み時間を満喫している。

どうやら考え事をする内、いつの間にか休み時間に入ったみたいだ…どうも、オレの脳は勉強以外の事に関してなら驚異的な集中力を発揮するらしい。

…そこは違うだとオレの脳ミソにツッコミを入れたいがどうだろうか？

「何だよ、キヨン。何か悩み事か？」

あ？ 何でそう思う？

「深刻そうな顔してっから嫁さんが心配してんぜ？」

「ちよっ谷口くん！ だ、誰が誰のお嫁さんよ！？ もうっ」

そんな不用意とも言える朝倉はキヨンの嫁発言に対し、当人の放った照れ右ストレートが谷口の胸部に炸裂すると悶絶して膝から落ち、その場に倒れ伏した。

…あー、谷口？

「生きてるか？」

「…」

「今、右足がピクツてしたから多分大丈夫じゃないかな」

「じゃあ、問題無いわね」

状況を作った本人はのほほんとした様子でそう言つてのけるが、オレの方を向いた途端、またその太くも整えられた眉を潜めて見つめてくる。

…言つたろ？ 何でもないって。

「だから心配すんな」

「……………うん」

やや間があつてから頷く朝倉。

本当は納得していないようで何かを言いたげだったが、タイミン
グ良く次の授業開始の鐘が鳴る。

それと同時に入つて来た教師のおかげでそれが口から出ることは
無く、それがどんな内容なのかを知らうにも授業中に聞いてくる事
はついぞ無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8603e/>

涼宮ハルヒ（コ）の短編集

2010年10月10日03時19分発行